324
64

日種讓山著

岩山禪師言行錄

發行所 寶文館

324-64

岩山禪師言行錄

日種讓山著

發行所
寶文館

明治
41 1 8
内交

故天龍寺管長峨山禪師

峨山老師畧傳

師は孝明天皇の即位第七年嘉永癸丑之歳を以て平安城下に生る。俗姓橋本氏。其家は下京烏丸四條下る町に處り。酒舗を以て業とす。師幼時岩倉の郷城守氏に哺乳。五歳にして鹿王院に入り義堂和尚を師とす。即ち入道の太初なり。

はじめ橋本氏の室孕むや。其の男子たらば僧侶となすべきを豫期す。蓋し洛陽の俗丑年の生兒は家に置かざるの風習あれば。師鹿王院に在りて時に生家に往くも。母氏嚴正俗戯を許さざるを以て。漸く生家を厭ひ專ら學に就く。良母外に戒め大德内に敎えて師の法器日に月に進み年と共に長ぜしなり。

元治甲子の歳。薩長の兵京阪を騷がし。本山天龍寺亦兵燹の厄

に罹る。鹿王院義堂嫌疑を以て召され。大衆逃散す。師時に十二歳。嚴然院を守り獨り留つて去らず。義堂事有らんを危ぶみ。叱して去らしむれども聽かず。曰く水火唯和尚に從はんのみと。義堂之を奇とし窃かに大成を期す。

今上天皇の即位二年。義堂和尚遷化。師時に歳十六。悼傷感憤其恩に報んとを欲す。翌明治巳巳。乃ち鹿王院を辭し濃州正眼寺に詣り。泰龍和尚に師事し。刻苦砥厲辛酸具さに嘗むると前後十有一年にして又鹿王に歸院す。學道日に高し。時に滴水和尚天龍寺に在り。師又和尚に就て參道益々勉む。

此時に當りて鹿王峨山の德聲漸く大方に傳はり。桑門志學の輩遠近道を求て來り參する者多し。師皆容れずして曰く。法を聞んとする者は去つて天龍に行け。さらずは東福妙心建仁相國等に行け。皆各巨匠の存するあり。未だ吾衲が法を說くの時に非るなりと。謙遜自ら持して先德を推進する概ね斯の如しと云ふ

師二十八歳を以て美濃より鹿王に歸院し。精を蓄え素を養ふこと十年。其間勤儉用を節して院の頽破を修繕し。自ら書を販ぎて工資を補ふに至る。後請せられて攝州南宗寺に住職たり。茲に於て甫て衆に接す。時に明治二十四年師の歳三十九なり。師の南宗寺に在るや。接衆三年にして又鹿王院住職に復す。茲に於て雲居僧堂を董し。學衲常に八九十人。道名隆々として宗風益々振ふ。聲門大族も下りて道を問ふに至り。天下又佛日を拜せんとを望めり

往年滴水和尚の遷化せらるゝや。師襲で天龍寺派管長の重職

に當り。鋭意更振を期し。朝野有道の士風を望んで來り法に歸し。信願の力に依るが故に。四十年來の宿案たる天龍寺再建の業も。師の手を待て成就するとを得たり。

干時今上の三十有三年。節晩秋に際し。師違例あり。九月中旬より肝臓痛劇漸く肺炎に及び。昂熱四十二度を上下するに至る。嗚呼一代の名德在世僅に是れ四十八年のみ。而かも斯の如くにして遂に危篤を報じ。翌月一日の朝。西面北頭して天龍寺僧堂に示寂す。是れ佛日光を失ふ法界の大故なれば。遠近の檀信大小の學徒。報を得て馳せ赴く者。訃を聞て歎き悲む者。堂上堂下一時群を爲せり。

是れより先師の濃州に在りて泰龍和尚の遷化せらるゝに會ふや。泣て遺屍を抱き。聲涙俱に下る。仍て天下の道豪泰龍の後に於て其師と仰ぐべき者を數ふ。以爲へらく天龍寺滴水に如く者なしと。乃ち泰龍の喪に服すること一年。而して後贄を滴水に納れしと。其道情深篤にして殊に師道を重んぜる。概ね是れに類す。其他一代の言行は別に言行錄に詳具せるを以て爰に之を略す。

例言

予曩に峨山逸話を編纂して。道交の士に頒たんことを故川那邊貞太郎氏に謀る。氏之を深山一郎氏に囑して上梓し。非賣品として世に相頒つこと既に數千部に及べり。爾後本書を請はるゝの士太だ多くして。到底非賣品の能く盡す所にあらざれば。這回更に資料を同參の禪師及び居士等に請ひ。旁ら逸話を訂正刪除して。峨山禪師言行錄と題し。玆に世に公にし。以て同好の士の慾望を滿たさんとす。

一老師の垂示談片は。專ら其氣機の天眞を寫すを期し。俗言放辭も勉めて原調を存す道交の記聞筆錄の如きも。亦多く原文に隨ひ。章句の爲に其實際を失ふことを避けたり。讀者文

體の一定せざるを恕せよ。

一老師の言行批判元と順次なくんばあらず。而かも本書は得るに隨つて編纂せる者なれば。時序年度に於て前後の顚倒多し。讀者幸に之を寛假せよ。

一本書の資料蒐集に就ては。半ば後藤宗旭苅谷無隱兩君の力による。玆に芳名を記して兩君及び川那邊深山兩氏の勞を謝す。卷末の訪問記は。天外黑田君此擧を贊して特に寄せられたる者なれば。明記して之を謝す

明治四十年初秋　　編者識

峨山禪師言行錄目次

一　大きな腹……一
二　坊主は損な商賣……四
三　幼時の豪膽……五
四　魚肉珍らしくない……六
五　住職訓誨……六
六　峨山の天龍……七
七　馬鹿の附合……八
八　無我無敵……一〇
九　眞心一片……一一
一〇　小刀創もつかぬ……一二
一一　政府の力は借らぬ……一二
一二　小さいのでよい……一三
一三　山上の接心……一四
一四　山縣侯と問答……一五
一五　正眼寺の怪物……一六
一六　禪も蕎の附合……一七
一七　穢多と大臣……一七
一八　峨山の衣……一九
一九　換水訓示……一九
二〇　一寸家康に……二〇
二一　橫着坊主を打殺せん……二一
二二　郡長と管長……二二
二三　殺生戒の垂示……二三
二四　嫌位は好いが……二四

二五　坊主の見識……二四
二六　自から米を踏む……二五
二七　家主の心得……二六
二八　口先と筆先……二七
二九　川口男の膽を裂く……二七
三〇　信心力……二八
三一　末松男を驚す……二九
三二　義堂の大喝……三〇
三三　山上の垂訓……三〇
三四　難兄難弟……三一
三五　住職規約……三二
三六　溺水と救助……三二
三七　頭陀袋に網代笠……三三
三八　根本が薄弱……三四
三九　參禪問答……三四
四〇　慈の一字……三五
四一　敵はない……三六
四二　袋袋打捨てよ……三七
四三　普請と雲水……三八
四四　勸化は峨山の役目……三九
四五　火事見た爵……三九
四六　牛のケッ……四〇
四七　本心と幽靈……四〇
四八　報恩の心得……四一
四九　兩請と接心……四二
五〇　內地雜居と宗教家……四三
五一　井戸と法衣代……四四
五二　角力談……四五

五三　天地と人間……四五
五四　師の淸廉……四六
五五　堺の西洋料理……四七
五六　峨山の汽車……四七
五七　神經病者へ垂訓……四八
五八　夫はお互樣……四九
五九　畦さくら……五〇
六〇　おれが殺した……五〇
六一　靖州和尙の談……五一
六二　利井明朗師の談……五二
六三　炊事と無駄事……五六
六四　新年の訓誡……五七
六五　峨山は動かぬ……六二
六六　星亨と問話……六三
六七　虎嘯獅吼……六五
六八　鹿の供類……六六
六九　托鉢の垂誡……六七
七〇　射的と修行……六八
七一　幽靈の芝居……六八
七二　侍者の前は窮屈……六九
七三　某大佐を呑却す……七〇
七四　法盛なれば魔亦盛也……七一
七五　戰役と書束……七二
七六　嵯峨燒庵主……七三
七七　鬼禎……七四
七八　文禪と武禪……七五
七九　椽のみの眼鏡……七六
八〇　以身說法……七六

八一　二十分間に百八十万圓……七八
八二　石屋の事は不案内……七八
八三　念佛の法話……七九
八四　峨山は峨山……八一
八五　佛骨奉迎……八一
八六　土方の手傳……八二
八七　仕事の秘訣……八三
八八　佛樣には遠慮は無用……八四
八九　月に灯火は不風流……八四
九〇　初志を全ふせよ……八五
九一　天下にやれぬ事はない……八六
九二　龍淵和尙の談……八六
九三　洞宗和尙の談……八八
九四　藥師寺老尼の談……八八
九五　井上の談……八九
九六　加藤帥の書東……九三
九七　見臺待者……九三
九八　近きに苦衆生あり……九四
九九　小山氏の談……九五
一〇〇　無隱居士の談……九七
一〇一　時計持と鎖持……九七
一〇二　不實と不德……九八
一〇三　南涯居士の談……九九
一〇四　文明とコロボン……一〇〇
一〇五　捨身の試驗……一〇一
一〇六　禪坊主と角力取……一〇一
一〇七　質素と實情……一〇二
一〇八。慈悲松樹に及ぶ……一〇三
一〇九　女子と三十棒……一〇四
一一〇　讀經と淨瑠璃……一〇四
一一一　弊衣保存……一〇五
一一二　師資の禁酒……一〇六
一一三　何ぞ俗吏を煩はさん……一〇七
一一四　復古の一點張……一〇七
一一五　新內閣組織……一〇八
一一六　師と品川子……一〇九
一一七　又三千圓……一一一
一一八　品川子と須達長者……一一二
一一九　我を忘れてやる……一一三
一二〇　天龍と長州……一一四
一二一　脚下が留守……一一六
一二二　寒潭魚躍……一一六
一二三　牛頭馬骨と撰ばず……一一七
一二四　大西鄕かな……一一七
一二五　中井氏の談……一一八
一二六　公仙子へ垂示……一二一
一二七　松方伯に大工を照介す……一二一
一二八　峨山の內佛……一二二
一二九　愛宕登り……一二三
一三〇　峨山は變らぬ……一二三
一三一　ふとい奴ぢや……一二四
一三二　敎育談……一二五
一三三　車は體裁がよい……一二六
一三四　屁一つて天龍寺……一二六
一三五　三首座感泣す……一二七
一三六　一方の大關……一二八

一三七 鎖刀の御仕置……一三八
一三八 師の書束……一二九
附錄
一 訪問記……一三三
二 偈……一四九

峨山禪師言行錄目次 終

峨山禪師言行錄

日種讓山編

一 大きな腹

師化を遷し給ふ秋の末つかた。一夕月明に乘じて浪華に入り。政客某の門を敲きぬ。話頭轉じて嵐峽の月色に及ぶや。某肅然容を改め且つ語て曰く。峨山老師は誠に近世希有の偉人なりき。禪林閑寂の今日。獅子王の如く法林に吼傲して。雷名を天下に轟かし給ひ。各派の先聖を凌駕して峭巍々孤迥々として獨り天表に脫露し。世の道俗の歸仰を一身に蒐集し給ふこと。半世の刻苦辛酸こゝに煥發して。一大光明となりしに相違なしと雖も。越格の道骨。天然の人格の高きに因ると云はざるを得ずてす。私も今日まで。政治社會に實業社會に。又は法曹社會に出入して。東西許多の名士に接見せしも。未だ曾て峨山老師の

如き人格の偉大なる人に逢はないてす。誰てあつたか師を評して。峨山は釣鐘の如き人物なりと云つて居たてすが。誠に能く師の一面を穿ち得たる言と思ふてす。何故なれば。人ありて之を扣くこと大なれば。其音響も亦隨つて大に。之を扣くこと小なれば。其音響も隨つて小に。學者之を扣けば學者に應じ。田夫之を扣けば田夫に應じ。政客之を扣けば政客に應じ。書生之を扣けば書生に應じ。軍人之を扣けば軍人に應じ。男女老幼を擇ばず。各其器に應じ分に隨つて。所謂對機說法以て感化を與へられたてす。或る時の說話に。君もこれから國家の政治を取り廻して行くのてあらうから。大きな腹をこさへて置くがよい。腹が小さいと何事をやつても碌な事は出來ぬぞ。今の大臣とか政治家とか云ふ奴等は。大抵腹が小さいからな。外國人の足下のみを窺つて。やれ露西亞がドウだの。英國がコウだの。米國がドウだのと。何時も向ふにのみ付き廻りて。自れの脚下はお留守になつて居る。こんな幽靈ては大きな仕事は出來る者てない。先んずれば人を制すさ。何時も外國人にのみ先き廻りをやられて居ては駄目だ。日清戰爭の馬關談判はどうだね。自分の脚下がお留守だ者だから。李鴻章から尻の毛まて見拔かれて居て。少しも氣がつかなんだてはないか。夫て最後はアノ始末さ。百日の說法屁一つとは此の事だ。彼の時の御聖勅を拜見すると。今でも涙が溢れる。實にたまらない……。我が禪宗の修行なども。外交談判の趣があるよ。人が手も足も口も舌も動かさない以前に。凡か聖か直に見拔く。是てなくては禪宗の法を取り扱て行くことは出來ぬ。そこへ行くと昔の智識方は豪い者さ。何にも向ふが饒舌てからてなくては。見えぬやうなヘドロイ事ては碌なことは出來ぬさ。古人は靈十方世界是れ沙門の眼と云つて居るよ。此活眼を具して居れば。佛が來やうが。祖師が來やうが。魔が來やうが。何が出て來ても直に見拔て兎の毛程も殘さぬ。夫れに腹の中を。泥脚て縱橫無盡に踏みニジられて。少しも知らぬ馬鹿がある。此活眼を具して始めて國家の政治も。自由自在に取り廻して行く事が出來るのだ。列國が何をやらうと香をやらうと。微塵ばかりも動くことはない。自己の信ずる所を。ドシ〳〵やつて行けるのだ。人を奪ふて人に奪はれずてなくては駄目だ。おれは雲水に此大きな腹を造つてやりたいと思つて。八十人餘り敎育して居るが。君もちつと腹造

りに出て來てはどうだ。學校の教育なども然うだよ。何でも國家の役にたつ人物を造らうと思へば。大きな腹の奴を造らねば駄目だ。西郷などの腹を見ひ。實に大きい者だ。維新の彼の難局に相遇して。泰然として我が信ずる所をドシ〳〵やつて通つた。腹の中に餘りある所がないと。なか〳〵コウは行かぬ。今の大臣や政治家に。西郷の半分程の腹の有る奴が一人なりと居ると。日本も今少しは威張れるに。殘念だが仕方がない。君もチト腹をこさへて置くがよいと話されましだが。私に取りては實によき訓誨ですと。

二　坊主は損な商賣

師一日南宗寺蜻州和尚に戯れて曰く。おい蜻州さん。此頃はちつとムマイ事があるかね。お互に坊主は損な商賣だな。身も心も人の爲に捨てゝ。働き通しに働らき。チツトもムマイ事はない。こんな損な商賣は世界に二つとないよ。おれでも三井の番頭にでもなりて居たらな。此頃は美人の纖手で。晩酌でもやつて居やうにと呵々大笑せられけるとなん。

三　幼時の豪膽

虎生れて三日牛を食ふの機ありと。誠なるかな。師は齡い僅かに五歳にして。天龍寺山内鹿王院に入り。時の大德義堂和尚に見へて。剃髪染衣し給ひぬ。明治革新の初。堺御門の變あるや。義堂和尚起居安からず。常に病の床に打ち臥し給ひければ。師を始として閤山の大衆。軍馬の來往砲車の轟にも胸を痛め心を措きぬ。時に長州藩同寺を借りて陣營したりければ。衆大に之を憂ふ。されど和尚更に之を意に介せず。却て長州藩の爲に種々便宜を與へ給ふ事偶ま切迫し。幕吏來りて長藩の撤去を促がすと急なり。若し之を肯せずんば。直に砲口を開ひて。以て一擊に灰塵に付し去るべしと達しければ。義堂和尚病を勉めて。閤山の大衆を一堂に集め。明日よりは必ず戰爭始まるべし。然れども老僧が號令を下さざる間は。決して騷擾すべからずと懇に之を諭し。茶飯など炊ぎて馳走せられける。時に座下には。寛量龍淵等の諸先輩ありたれど。皆大に恐怖し。顏色青ざめ。碌々食事もなし得ざりしに。師は當年僅かに十二歳の一沙

彌にも似ず。悠々茶飯五六椀を喫却し。且つ三四時間安眠を貪れりと。義堂和尚之を見て。滴水に語りて曰く。異日我道を興隆する者は。必ず峨山らなんと。大に賞歎し給ひけるとぞ。

四　魚肉は珍らしくない

師一日京都に入り金森某を訪はる。時正に晝食の頃なりければ。主人特に料理屋に命し。魚肉の酒肴を以て師に進めけるに。師は溫顏に笑を湛へて。おいく峨山はこんな者は朝から晩まで喰ひ通しに食つて居るから。一向珍らしくない。折角の御馳走なら。茶呑茶碗から灰磨きにして。少しも醒くない樣にして食はして呉れと。椰楡一番せられける。主人後ち人に語りて曰く。一向珍らしくないとやられては。二の句は續けぬ。さすがは峨山和尚なり。他の坊主と大分違つた所があると。

五　住職訓誨

元と師の座下にありし僧某。法類信徒の懇請に應じて入寺の式を擧げ。一日入院披露の爲め到り謁を乞ふ。師座を與へ乃ち諭して曰く。今は妙な時節となつた。住職すると法類の和尚始め檀徒の者どもが。直に妻を娶れ魚を喰へと勸めるので。偶ま精進堅固の者も。寺を持つと三年立たぬ間に。魔道に這入つて仕舞ふ。誠に遺憾なことだ。お前もドウか斯ふ云ふことをせずに。堅く身を守つてやつて呉れ。百日の說法も屁一つで化ける樣なことをして呉れるなよ。今の世では肉食妻帶さへ愼んで居れば。學問も座禪も不必用のあり樣だ。德川時代よりは。坊主がしつかりすればする程仕事が出來る。何も騷ぎ廻りて政府の力を借らなくてもよいのだ。法幢を建立することは。今の方が舊幕時代よりも餘程仕よい。若し仕にくければ。夫は其人の信念が薄弱なのだ。どうかお前も法の爲に身を惜まずに堅固にやつて呉れと。

六　峨山の天龍

師一日觀池に臨みて揮毫せられけるに。側らに客あり師に謂つて曰く。老師

の書風は實に能く鐵舟居士に似て居ますと。師笑つて曰く。馬鹿を云へ。鐵舟がおれに似て居るのだ。客又曰く。どうか天龍峨山と落款を願ひたう御座りますと。サウかおれは峨山の天龍かと思つたら天龍の峨山か。

七　馬鹿の附合ひ

往年公認教問題の起るや。世論囂然たり。時に某新聞記者師を訪ひ其意見を扣く。師乃ち曰く。如何に時世が變更しても。おれはやはり雲水である。宗教は信を以て行なはるゝ者であるからな。看板ばかり立派にして見た所が。つまり信が無うては駄目さ。佛教が公認教となつた所が。別段異なつたこともあるまいからね。又公認教として保護して呉れと云ふた所が。政府も承知すまいよ。公認教運動の爲に。各宗各派の負擔が增加するのを。おれは洵に氣の毒に思ふのだ。夏もあれば冬もあるさ。サウ心配したこともなからう。昔は渡守(巖頭)をして法を說いた人もある。維新の際には。おれは佛教は潰れるかと思つた。然し今日も斯ふして存して居る。マア何事をやるにも。己れの足許を明かにしてからのことさ。佛は如才ないことを云ふて居る。波羅門の世には波羅門となつて濟度する。馬鹿の世には馬鹿となつて濟度する。雲水のおれが。公認教運動に與するのも。馬鹿の附合さ。

日本は昔より佛教で固めたのである。維新の時佛教に代る道を立てずして。潰さうとしたから堪らん。人間が輕薄になつてしまつた。今の世は肺病患者のやうな者で。もつと惡くなりさうだ。

寺の住職が檀家の信念を固ふさへして置けば。耶蘇教などは少しも恐るゝに足らぬ。政府の厄介になつて耶蘇教を防がうと云ふは。實に意氣地のない話である。なんぼ立派に口は利いても。家族に善く云はれぬ奴は先づ駄目さ。おれは實業家だから。弟子を育てゝ善い品物を作るのさ。名僧智識さへ養成して置けば。何事が出來て來やうと。恐るゝことは少しもない。

天龍寺再建かね。夫は三年かゝつたよ。おれは川田(日本銀行總裁)にさう云つた。再建工事には。雲水は一人も使用するとはならぬ。天龍寺を再建しても燒ける時には明日でも燒ける。小僧一人でも。後には天龍寺の二つや三つは。尻

からヒリ出すやうな名僧智識となるかも知れぬ。又他より弟子を預つて居れど。人夫に使用するやうに預つては居らぬと。此事を後に品川さんに話したら。品川さんも喜んで贊成して呉れたよ。

富士山はヌッと高ひから。誰が見ても實に感心するよ。

八　無我無敵

師ある日平生の木綿衣のまゝ。本坊の裏なる曹源池のほとりを。誦經じつゝ散歩せられけるに。主人の伴をして參詣に來りける十一二才位の丁稚。庭園を見廻りつゝありしが。ちよこ〳〵と師の側に馳せより。おい坊さん此池に居る魚一匹おくれんかと。師頭を横に振つて曰く。いや〳〵叱られるぞよ。丁稚曰く。そんなことを云ておいて。御まいが生臭坊主の親方だらうと。師無語室に歸り侍者に云つて曰く。流石の峨山も今日丁稚の挨拶には困つたわい。何ぼ威張つても無我には勝てぬぞ。

九　眞心一片

師一日敎育家某に語りて曰く。たとい何程學問が出來ても。眞心のない奴は駄目さ。布敎などもサウよ。禪宗坊主の布敎は他宗とは別だ。口でやらずに此身體でやるのだ。敎育の事も亦これが肝心だ。何程口では巧妙にしやべつても實行の出來ないやつは取るに足らぬ。敎員が自ら堅く信じて實行すれば。自然に活きた敎育が出來て。道德が振はないなどゝ泣顏するには及ばぬ。眞心一片で敎育して行けば。昔よりは今の方が敎育はしよい。又功績も實際に擧つて。國家の役に立つ人間が出來る。夫に此頃の奴等は皆口は上手だが。肝心の眞心が無いから。生徒をして實際に信ぜしむることが出來ぬ。此春てあつたか東京でも皆にさう云ふて置た。世を動かし人を感ぜしむるのは。口や學問では駄目だ。只一片の眞心があれば。口はきかなくても學問は無くても。天地を動かし鬼神を感ぜしむることが出來ると。大抵の奴が理屈は能く言ふが。世の中の事は理屈や法律の屆かぬ所がある。人間も名譽だの利益だの云ふことを離れねば駄目

だ。大きな人間にはとてもなれぬ。名譽だの理屈だのと云ふ事を飛び越へた所から仕事や教育をすると。ホンマの仕事が出來る。此心得がないと理屈家は造り出しても。大人物は到底駄目だ。何ても眞心一片てやるがよい。さうすれば道德も自然に行なはれてくるからな。

一〇　小刀創も付かぬぞ

僧某一日師に見へて曰く。私の如き者が修行しましたら。越山や鐵牛の如き者になつて。却て大法に創を付ける樣なことになりますから。私はもう禪道修行は止めるつもりで御座りますと。師覺へず失笑して曰く。貴樣見たやうな者が。百年修行して婆多助三味てとんぼりがへりの土佐踊りしても。此の大法には小刀創も付くものか。

一一　政府の力は借らぬ

松方伯曾て總理大臣たりし時。一日京都に入る。天專座主村田寂順來り訪ひ。談偶ま宗教界の道德に及ぶ。寂順乃ち說て曰く。近來社會一般道德の地に墜ちしは。全く我が佛教の振はざるによる。政府を始めとして。佛教を尊崇し且つ之を保護せば。道德の回復期して俟つべきなり。乞ふ閣下能く之を扶樹せよと。師時に傍に在り。語未だ終らざるに憤慨一番して曰く。これは以ての外の事だ。吾が佛教は他の干涉を受ける必用はない。如何程衰へたりとも。政府の力は少しも請はぬと。又伯を顧みて曰く。政府は不如法の坊主共を。片つぱしから縛りあげて。ドシ〳〵其生首を引拔かれよ。其餘のお世話は一切御無用だと。一座爲に肅然たり。伯後ち人に語りて曰く。峨山々々と八釜しく云ふが。成程無理はない。眞に佛教界の泰斗てあると。

一二　小さいのでよい

侍者某佛に献せんと欲して。或る日花木の稍や大なるものを折る。師之を見て喜ばずして曰く。小さいのでよい。おれの處には。外に咲て居る花が見へぬやうな佛は居んわい、

小さいのでよい

一三　山上の接心

師壯年の頃道友某と尾張丹羽郡繼鹿尾山に登る。山は斷崖絕壁にして頗る禪行を修するに適す。山上に觀音薩埵を安置するの小堂ありければ。師等は此の所を道場と定め。三七日を期して接心をなし。相約して交代に炊事を手づから す。兩三日を經て。某曰く。以後吾れ自ら炊事の勞を取らん。公只打座せよと。師も亦其言の如くし日夜兀坐す。某も亦其勞を取るの傍ら孜々として究明せり。然るに滿期の夜某俄かに顏色を變じて師の袈裟下に伏し。聲を震はして連呼して曰く。おい禎公助けて呉れいと。師は其天狗の爲に脅かされしを知れる者から。敢て顧みざりしに。某暫時にして長大息して曰く。なか〳〵にこわかりしと。師曰く。馬鹿めがと。翌朝山を下り。本寺に謝して將に去らんとす。始め師等の到るや。寺僧謂へらく。彼等風來の漢亦必ず二三日にして歸り去るべしと。蓋し天狗の接居せるを以て。幾個の雲衲伴を結び。來り接心すと雖も。遂に其終りを全ふする者有るなし。然るに師等。無事三七日の接心を了じたるを以て。寺僧大に感じ禮を盡して之を待つ。其夜山上の堂に事まりければ。寺僧師に請て曰く。彼の堂古より妖怪出沒し。人皆之を懼れて。夜に入りて敢て行く者なし。願くば公等兩人の中。到りて事を辨せられんとを。師は某が前事あるを以て。故意に某をして行かしめんと擬す。某も亦前事あるを以て。師に請ふて止まず。師茲に於て抽籤を以て之を決す。某不幸其籤に當り益恐怖し。更に師に乞ふて曰く。公の用は如何なる事も吾れ之を辨せん。願くは公吾に代りて山上に到れと。師乃ち諾し去つて其事を辨じけるとぞ。

一四　山縣侯と問答

師一日東上のおり山縣侯を日白の邸に訪ふ。侯曰く。宗敎はドウも氣に入らぬ事が多い。師曰く。おれは又政治家はドウも氣に入らぬと。侯曰く。根津中佐の如き役に立つ男を。坐禪などさせて隱居させると云ふのは大體國家に不忠だ。師曰く。左樣さ。あれも忠義心もなく力の足らぬ癖に。金がほしさのあまり。大臣になりたがる人への模範です哩。誰が國家の政治を取り廻しても。誰

が總理大臣になつても。自分を捨てゝ奉公する人がないから。する事爲す事世界の人に笑はれ。良民を苦しめる。實に案じられたものだ。

一五　正眼寺の怪物

師侍者某に語りて曰く。これが伊深て園頭(菜園係)をやつて居ると。村の者が正眼寺の妖怪が出たといつて笑つた。其時分は伊深もなか〳〵えらかつた。スリキリ貧乏て。畑するにも鍬はなし。其は實にひどいものてあつた。其れて手やら足やらて土を掘つたり畦をたてたりせねばならぬ。夏の暑い日などは。芋の葉を頭からかぶり。木の枝を帶にはさみ。さうしてやつた。其有樣はまるて牛のやうだ。村の者がそこを通ると。そら又正眼寺の化けものが出たぞと云つて笑つた。お前達も園頭に出た時は。いや道具が足らぬの。いや今日は暑いのと云つて。なま皮するてはないぞ。おれが伊深に居た時に比ぶれば實に結構だ。何をやつても身を吝んてはならぬ。精出して骨折るかよい。

一六　禪も糞の附合ひ

近年敎界太だ多事にして。屢各宗管長會議を洛西妙心寺に開く。師も亦勤めて之に臨まる。侍者某一日師に謂つて曰く。會議などに度々御出席になるのは宜しくありませぬ。今日はお止めになりては如何てすと。師平然として曰く。禪も糞のつき合いさと云ひつゝ飄然として出て去り給ふ。而して議論百出沸騰鼎の如き時は。靜坐瞑目不動山の如くなりきと。

一七　穢多と大臣

居士某曰く。私が老師に面謁しましたのは。大阪の寒山寺て拈笑會の開かれた時てした。最も拈笑會は以前より組織せられて居たてすが。講義を拜聽したのは此日か始てゝす。何分禪の事は素養がないのてすから。講義を聞ても。聾の如く啞の如して更に了解が出來ませぬが。其音聲の高朗豪快にして意氣堂々。謂はゆる氣宇王の如しとは。斯の如きことを云ふのてあらうと感しました。毛

髮の末に至る迄一種の電氣に打たれたる如く思ひ。又精神が何となく活氣を帶びて。語るとの出來ぬ愉快を感じたです。私等の如く朝から晩まで塵中に頭を沒して居る者は。時々老師の如き人に接して。談話又は講義を拜聽すると。活動上に非常の益を得ます。其日講後の談話に。日本では穢多が一番殘忍で。人殺しや放火をすると云ふとだが。夫れは無理はない。舊幕時代の習慣もあれば。教育と云ふ者が更にないから。併し破廉恥な奴は。穢多のみてはないよ。大臣とか紳士とか云ふ奴を見い。私利を營み。賄賂を貪つて。公然法律の網をくゞて少しも恥とは思て居らぬ。夫れに人民が何かやると。直に法律に訴へて苦しむる。昔の穢多よりは今の奴氣の方が餘程ひどい。こんな奴等が上に立つて居る間は。道德も駄目だな。元に立ち戻りて再び穢多村を造つて。賄賂を貪る奴や。破廉恥な事をする奴は。どし〳〵ほり込んでやるがよい。法律でもなかつたら。おれが片つパシから生首を引き拔いてやるにと憤慨せられました。かりそめにも。大臣や知事の位置に居て。賄賂を取つたり醜聞を流したりして。毫も關はないですからね。我は一度峨山老師に御依頼して。伊藤侯や其他二三の人に。お話して貰ふ積りでしたが。遂に其期がなくて今日となつたです。佛敎の爲は元より國家の爲に。誠に不幸でありますと。

一八　峨山の衣

師天龍寺再建の勸化帳を携へて一日某の家に到る。主人師の法衣の餘りに麁末なるを見て。氣の毒に思ひ。本堂の再建よりは先つあなたへ。法衣を一枚進ぜませうと云ひければ。師はそれは有難ひ。見事峨山の着られる程の衣を拵へて呉れるかな。主人曰く。どの位て出來ます。ウンまづ四五萬はかゝるよ。主人曰く。そんな馬鹿な衣がありますか。師曰く。あるとも。現に今天龍で大工や人足が頻りに裁縫して居る。それは本堂じやありませぬかと。師曰く。其本堂が峨山の衣ぢやわい。

一九　換水の訓

侍者師の室前なる水盤の水を替へけるに。師は其側らにありて打ち見やり玉

ひしが。徐ろに口を開き。汝も侍者となりて半年も經つから。ぼう氣が付くだらうと思つて居たが。言て置かぬと生涯知らずに過ごす。物はなア。大は大小は小と。それ〳〵活して遣はねばならぬ。水を替へる時は元の水はそこらの庭木にかけてやるのさ。それで木も喜ぶ。水も活きたと云ふものだ。因地の修行をするものは。こゝろが要心すべき所だ。又洗面の水なども。ざつと捨てずに遣ふたあまりは。竹椽に流して洗ふのだ……。うむ水一滴もそれて死にはせぬ。皆活きて働いたと云ふ者だ。陰德々々と古人方が八釜しく云ふのも外てはないぞ。

二〇　一寸と家康に

師一日大阪に入り北區寒山寺に投す。時に座上法學士某なる者あり。師に向つて曰く。老師が今日天龍寺に住職たり。又同派の管長たることは。元より一身の名譽たるべきも。見來れば只是れ槿花一朝の榮に過ぎず。何ぞ速に一身の煩累を脫して。一休を慕ひ澤庵を學んで。孤身飄零。白雲流水を友として。大法螺を吹き立てゝ天下を馬鹿にせざるやと。師笑つて曰く。管長や住職となれば。法螺が吹けぬと云ふ宗規なければ法律にもないから。都合次第で一休にもなれば又澤庵にもなる。實に自由自在じや。お前さんも。四角四面な法律家を止めにして。一寸家康に成なつてはドウぢやと。學士呆然として語なかりける。となん。

二一　横着坊主を打殺さん

虛堂錄提唱の序で師衆に示して曰く。昔し南泉の普願禪師が獨り山中に庵居して聖胎を長養して御座る處へ。一人の雲水坊主が點心を賴みにやつて來たスルと南泉の云ふやうには。見られる通りの貧乏寺で。雲水一人置くとも出來ざる始末であるから。なか〳〵忙しくてならぬ。お前どうか世話てもあらうが。自分で飯を炊て食つて呉れ。我は今から山に行き晩にたく薪を拾ふてくるから。且御苦勞であるが其一分を握り飯にして。山まで持て來て呉れと云ふて飄然として山へ行つた。そこで其坊さんは委細承知したと云ふ按排て炊事に取り掛り。

和尚の處へ一分持ち行くことをも打ち忘れて殘らず食らつて仕舞ひ。其上鍋も釜も茶碗も土瓶も。有るとあらゆる勝手の道具を打毀して。袈裟文庫を枕にして南泉の寢床に這入込て高鼾。山中では南泉和尚甚過ぎになつて腹が減つても。彼の雲水坊主が飯を持て來ない。そこで南泉自から思ふやう。こりや一杯食されたな。ドレ歸つて見やうと。寺へ戻て見ると。憐れや貧乏寺て澤山もない勝手道具は悉く皆打ち碎かれ。食物は洗ひ流しの一粒も殘してない。雲水はどうしたかと奥へ行つて見ると。腹の裂ける程食ひくさつて高鼾だ。此時の南泉の心持はどんな者であつたらう。如今高臥憶前事。添得盧公寄石屏。と云ふ境界てゝもあつたか。まさか喧嘩にもならぬから。仕方がないと云ふ可愛想な顔付て。和尚も亦其雲水の寢て居る處へ行き。こつそり寢ころんだ。すると其坊主はエゝうるさいと云ふやうな面付て。御禮どころか挨拶もせずにさつ〳〵と出て行つた。流石は王老師と云はれる南泉和尚だけあつて。數十年來鍊へ上た力は又一段じや。又雲水坊主もなか〳〵やりてじや。しかし峨山などのやうな。氣の短い貧乏坊主の處へ來て。こんな横着を働いたら其れこそ大變。一打ちに打ち殺しやる。嗟吁惜しいことをしたと氣焰萬丈。

二二　郡長と管長

師一日東本願寺の嵐山別莊に郡長某等と共に招かる。法主晩餐の饗を設け待遇太だ至る。宴酣なるに及んで法主先づ杯を薦む。師頭を横に振つて曰く。腥い口て呑んだ杯はいやだ。法主乃ち洗つて之を薦む。師受て傾むくること數杯宴了りて庭前月に步す。時に郡長師の面を窺ひ。老師彼の席上の美人は如何に思召すやと。師曰く。其れだから郡長の上に管長がいるのぢや。

二三　殺生戒の垂示

或時の垂示に曰く。戒法家は殺生〳〵と常に八釜しく云ふが。殺生にも色々あつて。生ける者を殺すばかりが殺生てはない。時間を無駄に過すのは時間を殺す。金錢を無駄に費すは金錢を殺す。其だけの力もなくて大臣や次官の位に居るのは政治を殺すと云ふ者じや。會得もせずに矢鱈に法螺を吹き立てゝ禪道

家ぶるは佛法を殺すのじや。今日の樣子では坊主は大かた佛法を殺しにかゝつて居る。又政治家は日本の國家を殺し通じや。斯ふも揃ふて殺生好きでは。佛法と國家は體なしぢや。何でも水一杯遣ふて捨るにも。活して捨てるのが活佛法の殺生戒を持つと云ふ者じや。護生須是殺。殺盡始安居などの言句と取違へまいぞや。

二四　嬶位は好いが

曾て非地租增徵大會の京都に催さるゝや。三浦中將も亦之に臨み。會了りたる後ち十數名の政客を集め師を請して法話を乞ふ。師曰く。昔或人が轉宅をして鍋や釜や火鉢などは持て行たが。肝心の嬶を忘れたと云ふ話がある。嬶位ならばまだ好いが。今の人は我れながら我が心を忘れてさわぎ廻る奴が多いと。

二五　坊主の見識

公認敎問題鼎沸の時。師一日品川彌次郎子を尊攘堂に訪ふ。座に內務書記官某あり。品川子に向て曰く。此頃の坊さんは實に困る、あゝしてくれこうしてくれ。夫ては不利益之ては損だと。是も非もなしに政府の力を貸して呉れいと泣き付て。實に五月蠅てたまらん。道德だの品行だのと云ふ事は夢にも知らないと。師默々恐の如くにして歸り。講座の序切齒一番即ち說て曰く。どうも當時の坊主の見識のないのも程がある。何てもない事を直に政府の力を借りやうと。政府に泣き付て東京まで恥さらしに行く。其れよりは一層嬶でも持つて魚でも食つて寺にすつこんて居ばよいに。實にたまらん。法律てもなかつたら片つぱしからどし〳〵攫み殺してやるにと。師常に人に語て曰く。新聞などに坊主の醜聞が出たり。路傍て坊主の汚行を見ると恥かしくて消たくなると。

二六　白から米を踏む

師一夕鹿王院より歸途梅井某を訪はる。某偶ま在らず。因て確夫をして歸を促がさしむ。夫夜已に更け米未だ精しからざるを以て固く之を辭す。師叱して曰く。明日てよければ。今とは云はぬ。夫否むに由なくして出て去る。師侍者

を顧みて曰く。彼も雇はれて搗いて居るから無駄に使つてはすまぬ。汝もこい
と裳をかゝげ法衣を結びて自ら碓房に入り。汗を流して米を踏み玉ひしと。

二七　家主の心得

師一日神戸より歸途京都井上某の家を訪ふ。某師に語つて曰く。昨夜は御覽の通りの呉服屋の大火で實に驚きました。師曰くさうか。夫は氣の毒なとだが吾は以前から知つて居た。某怪んで其故を問ふ。師曰く。おれも雲水の時分彼の呉服屋には一二度も點心を貰ひに行つたが。大きな店の事だから中々能く規律が立つて隙き間がないので。繁榮するも尤だと思つた。此頃雲水に相變らず點心を呉れるかと聞いたら。時々腥い者をくれて困ると云ふて居た。其れて吾れが思ふに。彼の家も昔は中々拔け目のない内であつたが年に隨つて規律が亂れたな。何ぞ椿事が起らねばよいがと氣遣つて居た。おれが義堂について居る時。義堂が話したことがある。土藏の近所に箱や棒が地駄落に置てあつたり。摺鉢や鍋の中に三日も四日も水が入れて其儘にある樣なとては。必ず拳賊が這入るか火事があるか何事か出來る。一家の主人たる者は奥の間にすつ込んて居ても。店の邊から土藏。又は臺所の偶まて氣が屆かねば駄目だ。スルと自然家も規律が行なはれて拔け目がなくなる。拔け目があつては家は治まらんと。之に因つて考へて見ると。彼の家も坊主に臭ひ物を喰はせる樣ては乾度拔け目があるのだ。迚も此れては彼の家はいけぬ。家が傾くか火事があるか。放蕩息子が出來るか盜賊が這入るか。何か椿事が出來るだらうと思つて居た。何事をやつても拔け目のある樣ぢや碌な事は出來ぬ。

二八　口先きと筆先

學士某或日師に參し倫理の談に及ぶ。說き去り說き來りて滔々數千言。然かも一答辭を得ず。既にして某自ら其腹案を叩き盡して情露れ聲慄くに至る。師漸くにして曰く。其れもお前は口先きと筆先ばかりだらうと。

二九　川口男の膽を裂く

七佛以前に血脈を通じ。釋迦彌勒は是れ見孫だ。故に許さぬ時は釋迦が賴んて來ても達磨が賴んて來ても許さぬ。又王侯貴人ても法の爲には人情はないと。師は口癖のやうに常に云はれたが、今の宮內次官川口男爵が主計休職中。始終堺の南宗寺へ行き師に參禪した。男も禪に於ては初心の事てあるから。途中の活計て妄想分別の理屈講釋がなか〳〵多い。男一日例の如く三拜して將に師の室に入んとするや。ェヘ又いつものかす理屈かと百雷の一時に轟落せしが如く大喝一聲怒鳴られた。川口後ち人に語りて曰く。海軍の大砲の音には驚いた事はないが。峨山和尙の一喝には膽が破裂したかと思つたと。

三〇　信心力

師一日垂示して曰く。何んても坊主は信心力が大事じや。自分の信心力がなくて他を信じさせようと云ふのは全體無理じや。今の政治家だの大臣だのと云ふ人が。色々に世間て惡口されるのも自分の國家を信じて居らぬからだ。いつても外國人の擧動を見ては直にケロつく。何をやつても自己の信心力が堅忍不拔てなければ駄目だ。金にケロつく土地にケロつく。一生蒟蒻の幽靈て暮さねばならぬ。人が譽めやうが。謗らうが斯の大道に依て大信心力を以て修行するのが。何より肝要と思ふから一寸云ふて置く。

三一　末松男を驚かす

衲僧の口はかまどの如し。食は只法身の慧命を相續し得ば則ち足る。何そ好と惡とを論ぜんと師は常に云はれて。決して食物の好惡を說れなかつた。特に僧堂は他の信施によりて修行する所であるから。朝は麥のみの粥て晝は麥のみの飯てある。師も朝と晝とは必ず食堂に入りて。大衆と同しく此麥飯を喫却せられた。或日末松男が面會に來た。其時茶話の序てに雲水の修行の樣子やら食物の話が出て。麥のみの飯を食ふと云ふのはうそだらう。麥ばかり食つて居て修行が出來る者てない。本當なら一杯持て呉れと云ふから。侍者が茶呑茶碗に入て差出すと。男は指の先て摘まんて食つて見て。是が人間の食物てすか。是は實に驚き入つた。社會て滋養物などゝ云ふて居るが。かゝる者を常食として

居て別に害がないとすれば。滋養品などゝ云ふ事は信ぜられぬ。かゝる惡食をして然かも雲水の僧は皆頑丈てあるが。是は精神修養の爲てあらう。師茲に於て曰く。其位ひどい食物に甘じて修行する雲水の中て。おれが師家てあるからと云ふて獨り別物を食ふては濟まぬ。男も成程峨山の人と異つた所もこゝにあるのだと大に心服して歸りけると。

三二　義堂の大喝

天龍寺の兵燹に罹るや。師の本師なる義堂和尚。其燒跡に一茅庵を結び臘八接心中獨り懺摩會を修す。時に師年甫めて十二。一日講後和尚の袈裟を收むるの次いて。壁上に掛くる所の出山佛の圖を仰きて笑つて曰く。這は狩野永樂の筆なるが筆數多くして太だ佳ならずと。語未だ終らざるに和尚大喝一聲。それは貴樣の口數が多いのだと。師大いに感じ爾來復た多く語らず。

三三　山上の垂訓

師一日舊約全書山上の垂訓を繙き。明日の事を思ひ煩ふなかれ。明日は明日の事を思ひわづらへ。一日の苦勞は一日にて足れりとの語を稱して曰く。是れ實に至人の語なりと。讀んてわれ爾曹に告けん。そろもんの榮華の極の時だにも其裝この花(野の百合花)の一にも及ばざりきと云ふに至りて。覺へず手を拍つて曰く。えらいやつぢやと。學者を戒めて妄りに基督敎を議するなからしむ。時偶々同志社卒業生某來り參じて所見を呈す。語未だ斷ざるに一棒を與へて曰く。此馬鹿野郎奴。山上の垂訓を讀んだ程の者が。この惡臭氣を放つて山僧の棒を喫するとは。何たるウツケ者ぞ。しつかり山上の垂訓を讀んて來いと。

三四　難兄難弟

近世禪門の詩僧釋鐵眼と師とは法の兄弟にして法交尤も溫かなりき。鐵眼一日來り訪ふ。師曰く。ヲイ眼公。峨山も此頃は勸化にあるいて大分顔を賣たからな。貴公が食ふに困るやうなら。峨山の法弟だと云ふて何處ても行つて見い。到る處て御馳走をして食はして呉れるから。鐵眼答へて曰く。馬鹿云い玉ふな。

是から勸化にあるくなら。鐵眼の兄だと云ふてあるき玉へ。さすれば乾度人氣が違ふて澤山寄附金が集るからと。師笑つて曰く。止めだ〳〵。鐵眼の兄なら餅がよからうなんと云はれて。命から二番目の好きな酒が飲めなくなるから。

三五　住職規約

僧某住寺たらんとして道場を辭す。師之を誡めて曰く。お前も寺持ちか。何てもしつかりやるがよい。近い中に住職規約と云ふ者を製へて。妻妾を畜へたり魚肉を食つたりする不行跡の奴はドシ〳〵打き出して。伽藍がだうだの經濟がかうだのと。小面倒な寺は打毀して焚て仕舞て。だうか本當の坊さんを拵らへたいと思ふから。左樣承知して置くがよい……。はい身體が大事だ。

三六　溺水と救助

師一日客某に語て曰く。此頃大阪の或學校で。親父と師匠と一時に水に溺れて將に死せんとして居る。其時は何れを先に上げるかといふ問題が出て。生徒も答に苦しんだと云ふとだが。之はなか〳〵大切な事で。人としては尤も氣を付けて置かねばならぬ。斯ふ云ふ急場に臨むと。大抵の人は麻胡ついてうろたへ廻り。遂には自分も一處に死んで仕舞ふ。夫れでは全く犬死だ。斯ふ云ふ場合には一分間も猶豫は出來ぬ。親だの師だのと擇ふ間はない。飛び込み次第自分の近い者から救ひ上げるのだ。其れて一人なりと助けるとが出來る。親だの師だのと云ふて居れば。二人共に死んでしまう……。ウンそれで人倫に悖るとはないさ。

三七　頭陀袋に網代笠

師の鹿王院に在りしときは。外行總て頭陀袋に網代笠を具ふ。一日建仁寺にて各宗管長會議あり。同夜妙心寺派執事前田誠節と偶々同寺山門外に相會し。誠節之を見て乃ち揶揄すらく。禎兄貴公も好い加減に雲水の足を洗へ。時世を知らぬも程がある。師阿々大笑して曰く。時世が時世だからおれは網代笠に頭陀袋でやるわい。貴公こそ時世を知らぬと云ふ者だ。右の手に蝙蝠傘左の手に

カバン。そんな不自由なへどろい事は甘い事はないぞ。おれは人が何か遣らうと云へば。ヲイショと云ふ按排て兩手をずつと出すが。貴公のやうぢや鼻ふく事も出來まい。

三八　根本が薄弱

耶蘇教家某一日來り訪ひ。頻りに教法改進の說を述べ以て佛教の守株を攻擊す。師曰くさうさ。耶蘇の方は追々賢たい人が出て改めて行く。おれの方は反對て。馬鹿者ばかりて本に返すことを專一とする。大變な相違だ。おれの方は釋迦が一番確かてえらいが。耶蘇の方は段々改めるとして見ると。根本がちと薄弱と見へるな。某默然として語なかりき。

三九　參禪問答

居士某一日師に見へて問ふて曰く

悟道は最初の關門を透破するが甚だ肝要なりと聞けり。其關門を透破するには。大河の水の如く。如何なる巨岩大石も避くることなくして之を透破すべきや。

又如何にと。

師曰く。如何なる巨岩大石もどし〳〵とぶち當り透過すべし。躊躇して居ては駄目だ。

曰く。如何なる水と雖も。ぶち當りて透過せは太だ傷ふにあらすや。

師曰く。ぶち當りて傷ふ水ならば。其は安心なり。

曰く。然らば如何せば其關門を透破し得べきや。

師曰く。突貫に及ぶ者は世界にないさ。

四〇　慈の一字

德川家康が死ぬるとき。其孫三代將軍家光を病床に呼んて。汝後日天下を治むるには。唯慈の一字を守れと諭した。此の慈の一字が德川三百年の太平の基礎ぢや。家康が死に臨んて居て。何の香のと種々なることを云はずに。唯慈の一字を諭した所は。さすかにえらい者だ。お前も會社や店て多數の人を使役し

て行くさうだが。店が無事におさまつて家が永く繁榮するやうにするには。やはり慈の一字を守らなくては駄目だ。此さへ實地に行つてゆけば天下に敵なしだ。國家を治むる道も畢究は此一字さ。番頭を使ふも商賣するも何も香も此慈の一字だよ。釋迦でも孔子でも。唯此一字によつて大仕事をしたのだ。今の奴等は口先きでは慈善だの何だのと八釜しく云ふが。名譽が得たいばかりに少し許りの慈善をやるのだ。眞實の慈善は決して今の奴等如く名譽心から出た慈善ではない。夫れだから見ひ。少しばかり金がたまると第一番に妾。次に別莊と皆出かけるではないか。自分の氣儘のみを働ひて。人に譽られやう番頭によく云はれやうと皆思つて居る。そんな卑劣な賤しひ腹で。誰が譽る者か。金を使ふにも。金を殺さぬやうに使はなくては駄目だ。別莊や妾に使ふ金は。多くは死に金さ。金のみではない。紙一枚使ふ上にも慈の一字を忘れてはならぬ。

四一　敵はない

師美濃正眼寺にありし時。或山中に一茅庵あり。雨漏り傘ちて狐狸の窟となりけるが。いつしか乞食共の探知する所となり。數十の乞食群をなして宿す。師制間(休暇)毎に必ず其群に投じて接心すること一周間乃至三周間に至りき。師後人に語りて曰く。おれが乞食の宿を借りて接心をしたことがあつたが。乞食とてなか〳〵馬鹿にされぬ。鍋や釜などを時々借りて粥をたきしに。不足な顏もせず。さつ〳〵と借して呉れた。又其中に一人惡いやつがあつて。時々同輩の者を盜む。夫れにおれの物は一度も盜んだ事はなかつた。何てもこちら次第で敵はないものだ。

四二　糞袋を打捨てよ

代議士某なる者煩悶に堪へず。師に安心の法を聞かんと欲して入室す。師單刀直入某に語りて曰く。何ても國民に代つて天下の政治を議する者は。先づ此五尺の糞袋をすつかりと打ち棄てゝかゝらねば駄目だ。小さな五尺餘りの糞袋に執着して居るやうでは。火打箱ほどの事にも煩悶を起して。種々顚倒を招くじや。某突出一番。舊來の知見を說破せられて。何とも云ふことがなくなりま

したと。喜んで辭し去れりと。

四三　普請と雲水

師一日衆に示して曰く。皆も承知の通り。當山も愈々再建に着手する事になつたが。山内の和尚方もお前等に勸化して貰ひたいとか。土を運んだり石を曳たり萬事頼みたいと云はれたから。其れは平に斷りだ。おれが處に掛錫して居る雲水は。普請勸化の修行に來て居る者は一人もない。此の末法の時節に。其んな氣長な事は云ふて居られぬから。皆には座禪をさせて。其の代り峨山自から勸化に行つたり人足の手傳をしたりして。八十人の雲水に代つて勞働を引受けると云ふて斷つて置いたから。皆もそのつもりて骨折るがよい。何ぼ立派に本堂が出來ても。よい坊さんが出來ねばだめだ。此の普請の成就するとせぬとは。一つにお前等の刻苦にあるのだ。決して峨山一人がえらいのではない。世間の人が峨山〳〵と云ふのも皆お前等の事じやと。嗚呼親言は親口より出づ。英雄豪傑の衆を接する大概是の如し。

四四　勸化は峨山の役

師。僧道の衰を慨き。來英を養育するを以て己が任となす。故に其弟子を待つや。修道を責るに於て嚴正假すなきも。又之を法外に役せず。本堂勸化の如き。自ら帳を持じて往返するに至る。得庵烏尾小彌太看て輕舉となし。其會下の大衆をして行乞せしめよと勸む。師之を拒んで曰く。馬鹿な事を云ふ者でない。峨山は。本堂位百でも建てると云ふ。釋迦でも達磨でも開山でも峨山でも。どん〳〵尻からこき出すやうな豪い坊さんを拵へたいと思つて居るのだ。勸化や普請の手傳に雲水を使役するとは斷じてならぬ。勸化は峨山の役目ぢや。

四五　火事見た罰

客あり師に謂て曰く。天龍寺再建の事久しく之を聞く。而して成らざること亦久し。老師出て玉ふに及んで忽ち竣功を告ぐ。是誠に高德の致す所なりと。師曰く。否な〳〵。是は予の德にあらず罰なりと。客怪んで其所以を問ふ。師

笑つて曰く。己れが小供の時。義堂に付いて鹿王に居たが。和尚はなか〳〵意地くねが悪いので。それが恐はくてならなんだ。偶ま天龍寺がスワ火事と云ふので。和尚は下僕を引連れて早速行て仕舞つた。おれは此時こそと思ひ。和尚の居間から砂糖桶を擔き出して水甕の中にぶち込み。鼓の中てしたゝかに呑んて。心地好げに火事を見て居た。今は其罰て此仕末さ。

四六　牛のケツ

一日文學博士某來り參じ。頻りに自己の識見を吐露す。師微笑して曰く。おまえは牛の穴ぢやのうと。博士怫然として問ふて曰く。何と云ふ事て御座りますか。師曰く。いやさ。もうのしりだと云ふ事ぢやわいと。

四七　本心と幽靈

師客某に語りて曰く。此頃東京の全生庵て世の中の奴は大抵幽靈だとおれが云つたら。某博士が夫は的が違つて居ると云ふて。長い間理屈を云ふたが。某博士も理屈の外には何一つない。やはり幽靈てあつた。今の學者は人の智慧を借りて皆しやべつて居るのだ。夫だから駄目だ。學問も智慧もすつかり打ち捨てゝ。本心の儘仕事するのてなければ碌な事は出來ぬさ。かう云ふやうに仕事して。かう云ふ風に切り廻さうと。前以て術策を立てゝやるのが。世間のやりかたゞか。それが一番悪いよ。世を渡るに何や彼やと考へたとて其通り世の中がなる者てない。たゞ〳〵其思慮分別を一切打ち捨てゝ。妄想や煩惱の爲に本心を掩はれぬやうにするが大事じや。古人は本心を磨き上げることになか〳〵骨を折つたよ。磨き上げて措くと。何時用いやうと自由な者じや。機に臨み時に應じて。ふい〳〵と妙策か出てゝ。世渡りか面白くなる。幽靈だと人の意見を聞ひて直きに迷ひだすじや。甲の人の話を聞くと。それか善いやうに思はれ。乙の人の話を聞くと。又それがよいやうに思はれて。自分はいつも幽靈て。人の後について廻はらぬばならぬ。是が本心の磨ひてない證據じや。人から借つた智慧や。本の上て習つた事は。實地に臨むと何の役にも立つ者てないから。お前も足下を要心して本心を磨ひて措くかよいぞと。

四八　報恩の心得

會下の僧某。滴水禪師遷化の時。典座(炊事係)の役に配せらる。依て師に請ふて曰く。都合があれば據ろ御座りなせんが。何卒因緣の爲めに靈龕を昇して下されたしと。師涙を浮べて曰く。お前たちが心を合してさういふ道情の厚い心掛て居てくれるから。隱居もさぞ定中で喜んで御座らう。然しなア。斯ふ云ふごてつく時は。誰でも遺骸のそばへばかり寄りたがるが。心ある者は。人の目立ぬ處で萬端の都合を運んで呉れるが。それが大事な報恩だ。マア役位の者にも相談して置うが……。

四九　雨請と接心

師堺南宗寺に在りし時。雨なきこと殆んど月餘。農家大ひに苦しむ。師其苦心を察し。大衆を召し。鎭守辨財天を請して請雨祈禱のため。一周間の接心を爲さしむ。期已に滿ちて。而も一滴の露だに下らず。乃ち陞座垂示して曰く。自から固く信じて眞心一片でやれば。どれ程の旱天でも。一滴の雨も降らぬと云ふ譯はない。汝等がド睡りて居るから。降る筈の雨も降らぬのだと。更に三日間の接心を命じ。さア是から三日間だ。逆立になつて居た所が知れたものだ何も衆生濟度だ。皆一生懸命に骨折るがよい。それて雨が降らなんだら。辨天を引きずり下して。粉葉微塵に踏み碎いてやると。衆皆感激。日夜を分たず刻苦す。果せるかな三日ならずして。大雨盆を覆すが如くなりきと。

五〇　內地雜居と宗教家

內地雜居準備論八釜しきおり。客某師に謁して曰く。內地雜居も久しき宿題なりしが漸く解決し。其實施の期日も目前に迫りたれば。政府は勿論宗教家も其準備に忙はし。或人の如きは。佛教を以て國教とせんと運動しつゝあるが。師の高見は如何にと。師曰く。內地雜居か。此は宗教家は宗教家。大臣は大臣で。皆各自に自己の腕を磨く好き機會だ。世間では準備だの何だのと騷ぎ廻るが。夫は大間違ひだ。嗅を持ち肉を喰らい。我儘勝手をしィ。國教運動だの教

會組織だのと。表面ばかり立派にやつた所で何が出來る者か。却て大法に創をつけるのみだ。宗敎家は宗敎家の作法を堅く守つて法道を修して行けば。何の世でも法道の行なはれぬ筈はない。宗敎家か皆めい〳〵にさうやつて行けば。百萬の耶蘇が脊揃ひて來たとて。びくともする事はないさ。

五一　井戸と法衣代

師は最も嚴莊なる法要の外は紫衣を用い玉はざりき。平常は勿論大抵は麻の法衣のみ披し玉ひしが。大阪の豪商某。一日師に向ひ。老師のやうに乞食坊主みたやうな風體をして出入されては。近所に對しても面目ない。今後は稍美なる法衣を召して出入されたしと請いければ。師はおれは貧乏て衣がないと。某曰く。さらば喜捨申さん。幾何金を要するやと。師曰く。さうさ二十圓もあればよからんと。然れば唯今差上申さんと起ち上がるを押し止め。まあ又のたびにして呉れいと。此の如くにして受けさること數回。後止むなく之を受け。副司に命じて其金を以て。聽寮の側に井を穿たしむ。後某來りて法衣成れりやと問ふ。師散歩を促がし。某を井の傍に導き。此間貰つた金はこゝに落してのオと。又他を言ひ玉はざりき。

五二　角力談

師客と晩餐の次て。談偶ま角力の事に及ぶ。師笑つて曰く。常陸山とか西の海とか云ふ今の大關位負かす事は世話ない事さ。客怪んて其所以を問ふ。師曰く。其は自分から倒れてかかゝるのだ。兎角自分によい顏して居つて。人を動かさうと云ふのは無理な話しさ。

五三　天地と人間

一夜大雪山河を沒して眼界總て一白。朝來一輪の朝陽輝々として東山の頂に上り。清絕譬ふるに者なし。時に師丈室に坐し。乃ち侍者に告げて曰く。マア能く考へて見い。世の中の人が。少々ばかり人の爲に仕事をするとか。國家に盡したとかいふと。あれもおれの發明ぢや。是れも己れの盡力ぢや。あの時自

一分がかうしたから今日はだうだの。やれ勳功。やれ名譽と。八釜しい事だがな。小天地とも云はれる人間にしては。實に恥かしいことぢやないか。此の景色を見い。ゆふべの中に世界中へ。何億萬石とも分らぬ大雪を降らして置て。此の朝日の姿はどうぢや。そんな事は一向覺へがないといふ鹽梅で。素知らぬ顏して今朝は又世界中を照しぬいて居る。此れてなくては大きな仕事は出來ぬぞ。

五四　師の清廉

師美濃伊深より歸り來りて鹿王院に住するや。堂宇頹廢百草壘をなして殆ど棲栖すべからず。師即ち再建を企て。百方勸化して資金漸やく集る。尙ほ百金を缺く。乃ち書肆聖華房を招きて曰く。我經藏に入り。二種以上ある書籍を選出し來れ。一部づゝ賣却して以て再建の資に充てんと。聖華房唯々として經藏に入り。多時にして數十百卷の書を選出し來り。師の檢閲を請ふ。師曰く。一部は必ず殘しあるや。曰く然り。然らば其價幾計て。曰く數十金。師曰く。夫にて汝には損なきや。曰損なし。遂に之を賣却して一語の評價に及ばざりしと。

五五　堺の西洋料理

師の堺南宗寺にあるや。寺門廢頽堂宇洗ふが如し。此間唯枯淡を甘んして接衆是れ事とす。偶ま京都竹村某暑を冒して來り訪ふ。師其遠來を喜び。今日は拆角出て來たから堺の珍味て西洋料理をよんて遣らうと云へば。某豫て當寺の赤貧を知れるゆへ。是は有難しと打ち笑ふ。師先づ侍者に酒肴を命じ。自ら雨戸を外づし。風呂敷を覆ふて以て卓となし。法堂の腰掛を擔ぎ出して以て椅子に替へ。さあ是て座敷は出來た。是から御馳走ぢや。第一に燒唐辛。第二に生豆腐に醬油。其次は隱元豆の合へ物。是が堺の西洋料理ぢや。しつかり遣らうと、某其の酒落なるを歎こび。醉を盡して辭し去れりと。

五六　峨山の滊車

師一日他出のおり侍者に問ふて曰く。今日は滊車にて行かうか。又は人力車にて行かうかと。侍者曰く。今日は急用なれば。人力車にては間緩るし滊車に

乘り行きたる方宜しからんと。然らば滊車にて行くべしと。衣の袂をまくり上げ裙をかゝげて。急に走り出したれば。侍者も亦裙をかゝげて走りたれども。なか〳〵に師の健脚には及ふべくもあらず。常に一二町づゝ遲れ勝なり。凡そ途の一里も行きしと思ふ頃。侍者は足已に勞れ果てゝ早や一足だに進み難ければ。侍者急に工夫を凝らし。後の方より大聲に呼ばりて。最早や用事が濟みたれば。滊車にて急くにも及ばす。是より人力車に乘りて行き給へと。息もたへ〳〵に呼ばわりけれど。師は猶聞かぬふりして走り玉ふ。侍者は愈々よはりて。其呼ばわる聲のいと憐れなるに。師氣の毒に思ひ。さらば人力車にて行くべしと徐かに歩みつゝ侍者に向つて曰く。汝我が座下にあると多年。かゝる急場の時にも。能く平生の所思を貫きて人力車と云へりと賞讃し玉ひけるとなん。

五七　神經病者へ垂訓

大工稻垣某神經病に罹り。坐禪せんと欲して敎を請ふ。師曰く。お前は色々と物事を考へるから。其病が起つたのぢや。其上に坐禪すると一層惡くなるから。まア止めるがよからう……。其病には首も手足もぶち切つて。死んでしまうが第一ぢや。見やうとしても目がない。聞かうとしても耳がない。歩まうとしても足がない。持つにも手がない。言ふにも口がない。鼻も何んにも仕方がない。此處で十分死に切るのさ。すると神經病處が。世界中に蟻の髮一本ない。其れから又首も手足も付けたらよい。其れこそ眞正無病の人ぢやと。智識の一事一法をも捨てず。造次にもこゝに於てし。顚沛にも玆に於てし。寸時も空くせずして爲人接化すること概ね斯の如し。

五八　夫はお互さま

師南宗寺に在りし時。大阪師團の兵野外演習の爲め來り。同寺を借りて宿舍に充つ。師乃ち執事某に命じて曰く。野外演習は國家萬一事ある時の用意だ。非常の艱苦を實踐せしむるのだから。彼等を大切にするは慈悲でないと。執事能く其の意を體し。兵卒は勿論將校に至るまで。雲衲なみに麥飯に蔬菜を添て之を供し。他は湯茶だに給せざりしかば。將官某大に怒り。一日無案内にて師

の室に闖入して。屹然と突立ちたるまゝ。我等軍人たる者は。身を君國に致し。一命を捧げて。上は皇室より下萬民に至るまで。之を保護する者なりと。聲を尖らして詰責すれば。師冷笑一番して曰く。それはお互さまよと。將官杜口爲すなくして出づ。

五九　畦まくら

師美濃伊深正眼寺に在りしとき。龍水。蜻州。熊嶽の諸氏と共に遠鉢に赴き。一日師宿舍依賴の番に當る。然も平然として之を顧みず。村外の古堂に入りて大の字になりて午睡す。黄昏に及んで。諸老空腹をかゝへて村中を戸毎に問ふ。皆知らずと答ふるのみ。己むを得ず村外に到れば。則ち高丘に古堂あり。若しやと語らい之を訪へば。師は猶睡中に在りて鼾雷の如し。叱呼之を問へば。師は大笑して口吟すらく「ゆうべどこへねた今宵はこゝに明日は田の中畦まくら」と。一同相見て啞然たりきと。

六〇　おれが殺した

明治二十七八年の役。會下の宮永大尉出征せんとし。來て師に教を請ふ。師即ち趙劭の無字を授け。反覆之を諭す。大尉大に喜んで辭す。後臺灣に轉戰せしが。匪勢猖獗にして我軍利あらず。衆皆退かんとす。大尉獨り奮然として曰く。鐵砲丸は我よりも遠しと。遂に奮戰して名譽の戰死を遂ぐ。師大尉の訃を聞きて。痛悼措かず。嗟呼訣別の際しつかり云ふてやつたが。其れが爲め殺してしまつたと。即ち追悼の偈を賦して黑板に書し。之を壁上に掲ぐること累日。偈に曰く、

追悼陸軍大尉宮永計太戰死於臺灣

爲君殺自大哉忠。臺北臺南志氣雄。參得趙劭無字話。還同天地不言功。

六一　蜻州和尙の談

私は峨山和尙と。伊深に十餘年一しよに居たがな。峨山和尙は何をやつても。並の雲水と違つて居た。畦はいつも馬鹿のやうに。ぐら〳〵眠つて居るが。夜はぐん〳〵骨を折る。日暮になると。いつも勢が出るから。夜鷹といふ評があ

つた。其れて雲水に俊骨を具へて居る奴があると。いつも嚴しく督して。夜など横になつて眠て居ると。峨山和尚は物もいはず。襟首とつて引づり起し。椽端へ叩きつける。擲ぐる。そうしてお廟の方へ連れていつて。此佛法が滅せんとして居るに。貴樣等が怠惰けて何うすると大喝する。出て來ないものは呼にやる。臘八の時などは。其眼玉が實に凄かつた。そうして角力が好て、力のある奴が來ると角力をとる棒押をする。相手のない時には。獨りて大石を持たり。材木を振り廻したりして。汗を取つてから坐禪をする。制間には毎夜深山に入り。岩石の上などで露坐をした。深夜黑暗々裏て。坐禪をすると大いに定力が錬れる。夫も薄團など敷くやうなことては駄目だと云れて居た。

六二　利井明朗師の談

僧某一日利井明朗師を六條街に訪ひ。峨山老師と會見の事を叩く。師曰く私が峨山和尚を天龍寺に尋ねしは。昨年七月廿日てした。法要があるによりて。暫時待ち臭れとの事で。暫く休息して居ると。間もなく歸られ。侍僧に導かれて其室に入り。佛骨奉迎に對する意見を承る折から。大阪信徒某よりの供養とて。和尚と共に茶粥の饗應に預り。御馳走と云ふ程てもなかつたが。餘程味ひのよい粥てあつた。其時私は。峨山和尚に向ひ。あなたは尊き管長の位に有りながら。日々かゝる麁食て御座りますかと尋ねると。お前はドウ云ふ身分かと返問されました。私は眞宗の勸學と云つて。尤も重き役て。常に二百有餘の僧侶の邪道に落ぬ樣に。教導して居る者てすと答ると。和尚はウンそんな事か。吾れの處にも坐禪をする雲水が。八十人程居るが。今にも佛法が潰ぶれる。食ふにも米はなし。飲むにも水はない。然し戰はねばならぬ。打死せねばならぬと云ふ時。おれと生死を共にする者が。慥に四十人位はある。名は天龍寺の管長ても。實は雲水の親方だ。別に樂みと云ふ事はないが。此の四十人の者が樂みてある。日々辛苦を共にして。やつて呉れるがナアと。夫より私は和尚に佛骨奉迎には不賛成ても。參拜なさる方が然る可しと勸めたれば。和尚も七十有餘の老僧の云ふとならとて。私の意を容れ。其月廿三日の佛骨授受式に出席せられた。此日は各宗管長始め。各派の僧侶は。紫衣金襴の法衣を纏ひ。互に美を競ふうち。

和尚は平然として獨り麻の法衣を着し。身の管長たるを知らざる者の樣でした。奉迎副使たる。妙心寺派の前田師誠節式場に臨み。遥羅佛敎の事狀を說明して。遥羅は實に佛敎國なり。皇室は美を盡し善を盡せりと。滔々數千言。和尚徐ろに問ふて曰く。人民は如何と。誠節師曰く。人民は甚だ困苦の底に見受たりと。和尚曰く妙な佛敎だなア。誠節師是に於て頓に杜口。復た語を繼ぐ能はざりし。夫より愈々授受の式を終へ。一同起立す。某師先づ音頭を取りて。日本國萬歲と高稱す。和尚時に默坐瞑目。宛も聾啞の如し。然る故にや。遂に和唱する者なかりき。此日和尚の引率したる。八十有餘の雲水が眞心を込めて。尊前に誦經せられしは。眞に佛骨に對して。第一の供養であつたさうです。此れ迄全く誦經もなかつたではないのですが。多くは金員の事のみを議して。眞の誦經と云ふことは。先づ無つたと云て差支へないのです。和尚が亡くなつては、釋尊も張合がありますまい。然し此後。峨山の山に。花を咲かせるのは。其膝下に在りて修行して居られた。雲水衆のやりかた一つだ。……ナニ詰らん。說敎や演說するより。雲水衆が。嚴寒酷暑の別なく。市中に托鉢して。影法師を世人に見せらるゝ方が。感化力が强い……。私も遺憾な事には。一度限りの面會でしたが。實に舊友の如くに思はれた。時々厄介になりたいと云ふと。和尚はおれも行くから。來て呉れよとの事であつた。十月上旬頃は。閑暇であるから約を結び。再會を樂み居りしに。百三才になる老母の病氣で。久敷看病せしも遂に果なくなり。此れよりは親とも賴むものは大勢の知人の中にも唯峨山和尚一人であると思ひ。去月の約を賴みに十月一日六條に歸り。和尚の臥病の事も聞き。又隣の看病婦が看病に行つたのも聞き。且つは心痛致し。何は捨て置き御見舞申さんと。二日の朝支度をなし。一寸新聞を見ますと。早や峨山老師遷化と記してあり。此時こそは。胸も破れる計りでした。和尚は私しより年は下でしたが。和尚の禪法を重んぜらるゝのと。私が宗乘に重きを置くと。共に合中したのである。將來道を尋ね。法を問ふは。此人なりと信じたる故。天龍寺の山內に草庵を結び。和尚に時々法を問ひ。一生樂む覺悟であつたのが。皆泡沫に歸せしは。遺憾千萬の次第ですと、追弔の歌を示さる。

おしめともおしみとけぬそあはれなる

嵯峨のあらしの山のもみち葉

六三　炊事と無駄事

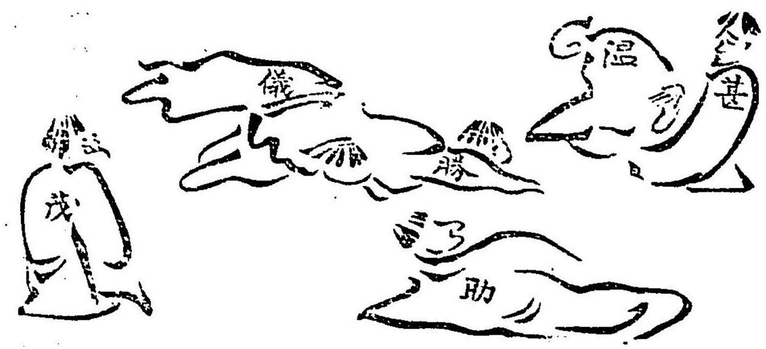
師一日侍者に語りて曰く。おれが十八の年伊深て典座の加役に入れられた。己れも此山天龍寺で育てられたのだから。威張ることは知てつ居ても。飯や汁の焚き樣は少しも知らなんだ。そこへ先役の因さんと云ふが。風を引いて寢込んでる。湯が沸き立つたが何うします。麥が煮へたが何うしますと云ふ工合て一々尋ねると。因さんはエー面倒臭ひ。天下の禅僧が麥粥の焚き樣も知らぬか。馬鹿な男だなアと小言を言ひながら敎へて呉れた。己れも我慢て三日ばかり獨りてやつて居たが。何うも慣れぬ事だから。朝は大衆よりも一時間も先に起きて。晩までかゝり詰めにしても中々忙がしい。少しも坐禪だの工夫だのと云ふ餘暇はなかつた。或日の晩方因さんが典座寮の障子を開けて。禎さん忙がしいかなアと云はれて忌々しいから。忙がしくてたまりませんと云ふと。因さんが面らの惡らしい風をして。そうだろう。見て居るのに無駄をして御座ると云つた。此一言が實に骨髓に徹した。其翌日から此の無駄をして御座るの一言を以て。終始念頭に掛けて仕事をした。其翌日は線香一本座はる暇が出來た。今日より明日と段々心掛けて見ると。仕事する間より坐禪する時間が多くなつて來た。トウ〳〵無駄をせまい無駄をせまいと心掛けて今日までやつて來た。なんても無駄をせん樣にやるがよい。

六四　新年の訓誡

師南宗に在りし時。書を裁し諸子に示して曰く。

新年の賀瑞目出度
皆々珍重無窮賀詞申上候。次ニ野衲モ無事ニ加馬齡罷在候間御休神被下。先ハ年始ノ祝詞迄。餘ハ追々寒氣ニ相成候間。風引カヌ樣禱申候早々頓首。

二十五年一月一日　　息耕



儀三郎
茂三郎
助次郎殿
勝之助
甚之助

各御兩新前ニ宜敷御一聲被下

温曰。今日ハ天龍寺カラ僧堂行ニテ。一日中走リ廻ッタカラ腰ガ痛イ。十計リ打テ呉ンカ。

儀三曰。荷ノ初揚デ。肩ハ痛イシ足ハ棒ノ樣ニナッタ目ハ眠タシ。温サン今夜ハ休ミマシヤウカ。

甚サンカワロウカ。

茂三曰。今日ハ揃ヒガ遲カッタ。本ハヤメテ詩ヲ吟ジヤウ。又私モ甚サンカワルデ。助曰。今日ハ濱ノ荷ガ初出ト寒サトデホツコリシタ。儀三サン

茂三サンアスノ晩カラ又骨ヲロウカ。私モ腰タヽクデ。甚曰。エヘヽーイツデモ十計リト云テ。百モ二百モ打ス。腰タヽキニ閉口々々。其モ本ノ代リナラマダヨロシイ。勝ハ高鼾キイデクウ〳〵……。兄サンヲモイ

梅井兩家小澤六人立寄云フ。毎晩御寺デ本ヲ讀ンデルト思テイタラ。本ハ讀

マズ行儀ハワルク。口ハ只本本ト云フ計リ。仕事ハキライ。下女下男ヲ使フハ犬猫シカル樣ニ云ヒ。親ニハ口ゴタイ着物ハヨゴシホフダイ。外カラ歸ルト上等着ヲアガリ鼻ニヌギツバナシ。始末ハワルシ其上シャツヲ買ヘ時計ヲ買ヘ。錢ハ大地カラ沸ク樣ニ思テイル。少シハ親ノ思ヲ知リソウナモノ。古人ノ本ハ誠ニ惡ルイ者トミエル。前ノ峨山ハ本讀メ〳〵ト私等ノ子供ニ勸メタガ。誠ニツマランヿヲシタアホウ……

親達サン案ジルナ。峨山ハ世界一目ニ見ル眼一ツト云タイガ二ツ迄持テイルカラ。御心配ニハ及バヌ。鹿王連鳥渡聞ケ。溫子モ今カラ人ニ腰ヲ打セテスムモノカ。人ニ敎ユルハ吾學也。古人惟道惟勤ト。儀三今日ハ休ム明日ハ休ム。何ト云フヿカ。古人モ勤ムル一日ハ貴ブベキ一日ナリ。忘ル百年ハ惡ムベキ百年ナリ。

茂三毎晩詩ヲ吟ジ。剩サヘ往返ノ道中ニ高聲揚ゲテスム者カ。道ヲ知ル者ハ恐ト云フガアル。

助イツデモ〳〵今日ハホツコリアスカラト云。古人若イ時ノ辛抱ハ錢ヲダシテモセイトアルデハナイカ。

勝チツト目ヲ覺マセ。其樣ニ本ガキライデハ阿房ニ成ル積リカ。古人云賢ヲ賢トシテ色ニ替ヨト。オ釋迦樣モ眠ル者ハ蛤ノ生レガワリト呵ツタヿガアル。甚ワヅカナ事ニ其八ノ字眉毛ハ何ト云フ事ゾ。古人云義ヲ見テセザルハ勇ナキナリ。

皆々ヨク聞ケ、アノ兩親達ガ八ノ字眉毛デ云レル事。一々痛處エ針サス樣ニ

アラフガ不孝者。

イヤ私ハト云譯ヲシテモ天ガ知ツテル。其ガウソナラ自分々々ニ腹ノ中ニ勘考シテミルト覺ガアロウガ。此ニ反シ。兩親ノ云フヲ先文ニ記シタ通ヲ好イ方ニ守ルト。實ニ三拜九拜峨山モ堺ノ濱カラ手ヲ合シテオガム。左スレバ今年モ目出度商賣繁昌親達安穩嵯峨モ好クナル、鹿王モ好クナル。天下泰平國家安全。至祝々々不盡穴賢

六五　峨山は動かぬ

臘八接心中僧あり入室す。師忽ち大喝一聲このド氣違ひめと言つて。惡打二三十棒。遂に室內より蹴り出し。北ぐるを追ふて禪堂に至り雷喝して曰く。此ド氣違ひ妨主め打き出してしまへと。翌日講座の次て大衆を睨視し聲を激まして曰く。皆の者がこうやつて修行をするのぱ。我慢を除く爲ぢや。其れに參禪に出て來て我慢て透さうとする奴がある。どれほど釋迦や達磨が千匹脊揃ひして來ても。峨山はミジとも動くものてない。

六六　星亨と問話

星亨一日師に謁し問ふて曰く。日本に行はるゝ佛敎には。各派區々に分れ氷炭相容れず。互に衝突ある如く思はるゝが如何。

答ふ大乘と小乘とは互に相容れざれとも。日本に行はるゝ佛敎各宗は。小乘なくして皆大乘なり。佛は機に對して法を說かれたるゆへ。道に入るの門戶幾箇もあり。是れ各宗派の分るゝ所以なり。修して其奧義に至れば。皆同一に歸するものなれば。少しも矛盾する所なし。

問ふ大小乘の別を一言に說明すれば如何

答ふ難行苦行を積み。己れ獨り悟りて足れりとするを小乘といひ。己れ悟りて安樂を得たる以上は。世人にも安樂を與へんと欲して。生々世々斯道に從事して自利々他するものを大乘といふ。

問ふ佛敎は消極的に陷るの傾きあり。其所以は寂滅爲樂を目的とするにあるにあらずや。

答ふ寂滅爲樂とは四句の偈の末句にて。前なる第三句に生滅々已とあり。問ふ所の滅は寂滅にあらずして生滅の滅なり。生滅とは雙對の法にて。寂滅とは絶對の法なり。生と滅との二つが眼中に遮らざるに至り。始めて寂滅となる。例へば政黨員の眼に當の敵見ゆる間は生滅の位にて。眼中已れに對するものなく。天下獨舞臺に至り。始めて寂滅の位に達するなり。人若し修し得て此に達せば。眞の大丈夫の働を爲すことを得。愉快此上なからん。

問ふ即今自身佛門に入るとすれば。如何の處より手を下すべきか。

答ふ今此の如く問ひ又此の如く答へ。座中此の如く聞き居るものあり。是れ何物ぞ。何は扨置き此の物を知るを以て第一着の急務となす故に。先づ已れが心根を明らむるより手を下すべし。

問ふ禪師は心を主とするといへども。心に善あり惡あり。唯々心の命する所ろに隨ふは危きことなきや。

答ふ我宗にて心を指すは本心を云ふなり。善あり惡あるが如きはこれを意となす。此の意は所謂る意馬なり。悍馬の如く跳躍するものとす。因て本心が此の悍馬を駕御して泛駕の憂なからしらるを本心の働となす。世間にては意と心を混雜して。異名同物の如く思ふは大なる間違なり。今問はるゝ所のものも此の類かと思はる。希くば本心を明にして。意馬を自由に調御せられんことを望む。

六七　虎嘯獅吼

師虛堂錄提唱の時。一日雲岳和尙至上堂の章を拈じて曰く。是不臥同床、爭知被底穿やだ。知音同士は好い者ぢや。なア雲岳さん、そやごんせんか。そうとも〳〵。昔は御互に骨折る頃は。石の上にも三年だ。若い時は二度ない。志願高大なれば富士山米粒の如しと云ふ勢でやりましたがなア雲岳さん。そう〳〵。今の者は法に親切がないから。坊さんが皆俗人に御へッをして。政府の力を借りたり皇室の御力を借りにや。法の爲に盡せぬと云つて。自分吾儘一杯をして居ると云ふ有樣だが。何んとそちやごんせんかと。一山の大和尙始め八十餘人の雲衲等が日常の弊害を細大洩らさず說きならべて。なア雲岳さん。そぢやごんせんか。そうともそうとも。知音と云ふものは好いものだなア。高山流水唱

和相應すると云ふは。此處らだなアと。其勢恰も猛虎の嘯くが如く獅子の吼ゆるに似たり。一衆目と目を見合すのみ。師下座後侍者に云て曰く。何ぼう人をいぢめる奴が出來ても。口からは稅を取られんて好いのうと。以來雲衲動止舉措の中に於て。清規に違ふものある時は。互にそら雲岳さんが御座るぞや。叱責せられんとする時。又雲岳さんと云へば一時の警語なりし。

六八　鹿の供養

師一日出京せんと欲して車を命ず。車夫與三吉到り待つ。時に一頭の負傷鹿龜山より走り出て。本堂を廻ること數回。車夫棒を提げて之を追ひ。大堰川の畔に到りて遂に之を擒にす。師出てんとして車夫を召す。夫見へず。乃ち侍者をして召し來らしむ。師曰く何處へいつた。車夫しか〳〵なりと答ふ。師車夫に問ふて曰く。汝人を乘せ走るとき復た鹿の出て來るあらば。車を捨て之を逐ふかと。夫前非を悔ひ深く謝す。師歸來侍者に語つて曰く。鹿は我れが殺したのだ。與三が居らねば助るのにと。乃ち大衆を召し之が爲めに誦經せしむ。

六九　托鉢の垂誡

舉山の大衆。春秋彼岸を期して托鉢の爲め大阪に向ふや。師は必らず垂示して曰く。何んでも獨りだと事は小さいが。禪宗の衣を着て禪宗の飯を食つて居る限りは。一舉手一投足も私に動かす事はならぬ。悉く人天の師範となるべき修行者らしく愼むが大事ぢや。又天龍寺は萬代の後まで叢林の名跡を保たねばならぬから。なあに峨山は一代ぢや。峨山は燒けば灰ぢや。お前等でも其通り。一人一人は何でもない燒けば灰ぢや。又不都合があつても獨りとすれば輕いが。禪宗の天龍僧堂に居る坊さんが。コウであつたと云はれては。當僧堂のみならず宗門一般に關係して。延いて佛敎者一般の顏へ泥を塗ると云ふもの。又第一佛祖へ對して濟まぬ。萬事如法に修行して行けば。識らず知らずと其れが化度になるのぢやから。禪宗の衣を此身に經ふた限りは。決して私しの舉動をしてはならぬ。何てんも禪宗の清規に順うてやると云ふ事が肝要てあると。

七〇　射的と修行

師一日垂示して曰く。何をやるにもセカ〳〵して早く功果を貪るまいぞ。弓を射るのに。的へ當てる事のみ樂みとしては。十本が九本まで好し的中しても但其れは當るのみだ。先づ體をきめて。十分に弓を引きしぼると。的が矢の先へヒツつく樣になる。此境界にならねば。何をやつても駄目さア。禪宗坊主の仕事は又格別だ。早く修行して人に譽められやうの。早く人に用ひられやうのと云ふやうな淺墓な願心では。よしえらい者になつた處が。お悟りの押賣てもするか。馬ぢや馬ぢやて。人を虛喝する馬方知識にほか成れぬぞ。

七一　幽靈の芝居

師曾て人に語つて曰く。峨山の處へ出て來る奴は大概幽靈だ。僻位の幽靈か。名譽の幽靈か。金錢の幽靈か。理屈の幽靈か。學問の幽靈か。お悟りの幽靈か。お世辭の幽靈かだ。其れはモウ何なりと依り處がある。臨濟和尙は。汝等悉く此れ依草附木の精靈ぢやと云はれたが。實に妙だ。名譽の幽靈からは名譽を奪い取り。金錢の幽靈からは金錢をコサゲ落し。理屈は理屈。學問は學問と一々其窠窟を打ち摧いて見なさい。ソリヤもう魚の炎天ぼしてお座のさめたものだ。何でも自分の脚で自分が歩いて出て來にや皆幽靈ぢや。マア今の世の中は。大抵幽靈の芝居ぢや。

七二　侍者の前は窮屈

師は朝と晝とは食堂で大衆と共に麥飯を喫却せられたが。晚は居間で大衆に遠慮しながら一酌やられるのが例であつた。其肴が薩摩芋の煎物位で飯は同じく麥飯である。然るに師はイツも頭を摩して。嗚呼勿體ないことだ。不隱德千萬だ。大衆の托鉢のスネを嚙つて。老僧獨り酒を呑むとは實に濟まぬことだ。昔し越溪和尙がいつも晚食前に一杯やられると。侍者が側について居て。如何にも工夫三昧で御座るといふ風に。しかめ顏して睨み付て居ると。越溪和尙最後に癇癪を起して。アッチ向いて居れと叱り付ける。侍者が驚いて後ろむく中

にグット一口に酒を呑て。飯を食はれたと云ふ話を聞ひて居たが。峨山も今日思ひ當つて實に窮屈だと。

七三　某大佐を呑却す

之は日清戰役後の事であるが。海軍の大佐が。政府はけしからぬ事をする。折角取り得たる遼東半島を還付するなどゝは。以て外の事だ。各大臣を片端より打き殺してやると烈火の如く怒つて。日々怒鳴り廻るので。同僚の人や師團長は皆困り果てゝ苦しんで居た。所が幸ひ峨山老師が寒山寺に投宿せられ居るので。何とか好方便はあるまいかと。某佐官が師に相談に行つたら。師は快く之を諾し。大佐のくるのを待て居ると。某佐官が大佐を伴なつて面會に來たので。師は直に坐に引き。四方山の話の末。此頃からは大きに御苦勞てした。戰爭も連戰連勝て。日本も世界に對して肩身が廣くなつた。併し東洋の世界は是からだ。日本が花役者となつておどらねばならぬ。ナニ遼東か。手のひら位の遼東半島などは何てもよいよ、與へて奪ふのも又一策だ。此より漸々支那印度とやらねばならぬから。遼東還付位が癇癪にさはるやうな膽玉の小さい事ては駄目だ。此頃の奴は多く膽玉が小いから。一寸とした事にも怒り廻つて自己の本心を失するが。眞に氣の毒な者だ。天下は廻り持ちだからまた時節がくるよ。そこて自分の腕を磨ひて置くが肝心さ。腕さへ磨ひて置けば。今度は滿洲から支那だ。せか〳〵しては好い仕事は出來ぬ。おれは東京て松方にさう云ふて置たから。軍人もマ少し膽玉を大きくして。シッカリしないと駄目だ。少し都合が惡くなると直に泣事をこきやがる。實に困つた者だ。眼中人無しと云ふ境涯になれば。敵國は一呑ぢや。ハヽ、峨山の口は大きな口だなアと。頭上より毒水を濺ぎかけられた者だから。流石の大佐も一呑に呑まれて。峨山は實に豪い坊主だと感歎して已まず。此より以後遼東還付事件に付てまた語を下さゞりしと。

七四　法盛なれば魔亦盛也

師一日乘示して曰く。法盛んなれば魔も亦盛んなりと古人が云つたが。實にさうだ。已れが若い時尾張の山奥て同行と共に接心をしたが。或晩已れが經行

して歸つて見ると。一人の男は退屈さうに詩を吟じて出て行つたが。間もなく周章て込んでやつて來て。オイ禎さん助けて呉れいと云ふから。ドウしたのだと尋ねると。怪物が怪物がと云つて顏も何も青ざめて戰慄つて居た。多分天狗にでも抓まれたのだらう。法盛んなれば魔盛んなりと云ふはコヽらのことだ。明天子が政を布かんとせる時は必ず奸臣が妨げる。釋迦にも提婆と云ふ奴がある。何をやつても同し事だ。志を堅固に持つてやらぬと必ず魔にさまられる。日清戰爭の時なども戰爭では勝つたが。結局になつてから。コチらの腰が弱かつたので。アノ始末さ。何でも志が堅固でなくては駄目だ。皆しつかりやるがよい。

七五　戰役と書柬

師二十七八年戰役の時。書を裁し會下の僧明堂上座に示して曰く。

時下酷暑之候

座下起居愈御清福南山此事ニ候。次ニ野衲モ無事御休神ヲ乞。陳昨日新聞上ニ廿五日ヨリ愈開戰之事實ニ驚入候。併此時相用候爲修行致居候。事實ニ大切。必ス亂暴之所爲無之。泰然トシテ間ニ髮ヲ容レス。元氣ヲ十分養。戰地ニ臨候節ハ銃一ツト相成。生死浮雲群魔降伏是ノミ祈。弊堂モ六十三名之麥粥僧非力ヲモ不願。只今朝ヨリ祈禱相始。大般若一聲ニテ群魔ヲ塵シニ致度專念罷在候間。交戰之場迄ハ。只々勤愼以元氣ヲ養置事肝要ニ候間。萬一之節ハ來生ヲ期シ。無上菩提修行是ノミ祈候。余ハ期平時萬々養生大切是又祈候。草々頓首

七月三十日　　峨山花押

朋堂殿

七六　嵯峨の燒庵主

山岡鐵舟曾て東京に一茅庵を結び。僧某を聘して住せしむ。某年に從つて素行不明。世人大いに其非を鳴らす。鐵舟之を聞き深く慨嘆して屢々面責すれど

も止まず。一日師を全生庵に訪ひ其策を問ふ。師乃ち告げて曰く。ウム其れは庵があるからいかんのだ。其庵を燒き拂つて仕舞へ。居り所がなくなればチツとはぢるだらうと。鐵舟手を拍つて曰く妙々。後ち書を師に寄せて曰く。燒庵は其儘に打過居候が。近頃少しく自慚の樣子相見へ候へば。自然改まるならんと存候云々。鐵舟之より師を呼んで嵯峨の燒庵主と云へり。

七七　鬼禎

僧某曰く。師が若い時修行中の勞苦は一と通りではなかつたさうだ。晝間は大衆同樣道場內で座禪をし。夜間も十時迄は其の通りだが。十時の消燈時間となると。皆の者は一齊に臥單に就いて安眠するが。老師は一晩でもヌク〳〵と蒲團に卷かれて寐られた事はなく。いつも皆が寐靜まると密々にまた座蒲團を抱へ出して。山て座禪をせられた。所が。直日(時の堂長)が或日大層小言を云ふて。消燈後には決して堂外に出つることはならぬと夜座を禁じた。老師は平氣て。其晩も例の如く座蒲團をかゝへて堂外に出やうとすると。直日が呵誰した。そこて老師は直日の枕元に行つて。力限りの拳骨をポカンと一つ食はして置て。サッ〳〵と出て行つたさうだ。若い時から鬼禎と綽名される位だから。尋常の氣性ては決してなかつた。大德の發したのも無理はない。講座の時には私共に向つて。何時も云はれた。何ても人の寐る時に寐て人の起る時に起て。十人並の骨折り方ては十人並にはなれぬぞと。暗に自分の若い時の事を追想せらるゝか如く感ぜられた。

七八　文禪と武禪

師一日島村某を訪ふ。談悟道の事に及ぶや。某火箸を劒に擬し。兩手を以て之を頭上に翳し。一刀下に之を兩斷せんとするの勢をなし。師に向つて曰く。私は武人てすから。此れて極め込んて居るてすがと。師曰くウンそれ一つになつて來いと。更に某に謂つて曰く。禪にはナア文禪と武禪とある。曹洞の如きは文だが已れの禪は武ぢや。師又曰く。參禪は擊劒の名人同士が。正宗の刀を以て切結んだやうな者だ。ハット云ふ間に首は飛んて居る。首が飛んだも知ら

ずに。べちや〳〵饒舌つて居る馬鹿があると。

七九　椽のみの眼鏡

俗某。性禪を好まず。師に謁する毎に禪僧の行ひを嘲る。師莞爾として多く言はず。チツと頭をうづかして來んと分らんナア。一日又某宅に於て頻りに師の說話を遮る。師笑つて曰く。眼鏡をかけて物を見るから困る。某曰く眼鏡なるかな。以て遠を望むべく。以て微を顯はすべし。而も紛々たる塵砂之を拒ぐに足ると。得々然として自ら喜ぶものゝ如し。師乃ち曰く其の眼鏡は椽ばかりて向ふが見へまい。

八〇　以身說法

師一日垂示して曰く。近頃布敎々々と世間て八釜敷云ふが。何ても禪宗は身を以て說法すると云ふ事が肝心だ。說敎も演說も必要だが。大抵の人が中流以下の爺婆ばかり相手にして。鬚てもあると巡査にも閉口する樣な小智小見てさ。又說敎演說しては到る處て誠に俗人にも恥る樣な擧動がある。あれぢやア却つて佛法に創をつける。丸て田舍廻りの乞食芝居にも劣るよ。赤い衣て金襴の袈裟を掛けて口ばつかり甘いことをぬかして。信徒を欺きくさる坊主が多い。已れが感心したのは道行堅固の德だなア。先年東京へ行つて歸りに。新橋の停車場て待つて居たら。獨り鼠色の衣を着て磯ない風をした。七十餘の坊さんが矢張待合に腰をかけて居た。すると後から金襴の袈裟や紫の衣を着た。化物の樣な若い坊さんが車てぞろ〳〵やつて來て。皆其きたない坊さんに頭を下げて。ドウもはや此度は段々御神勞に預りました。御承知の一條も色々心配致して見ましたが。何分あなたが賴むと一返御挨拶下さらば。双方圓滿に收りますから。御歸りの節猶一度御立寄りが願いたいと云へば。老僧が覺束ない口元て。左樣かなア。老僧が顏さへ出せば濟むとなら。又參りますと云ひ居つたが。實に德行と云ふ者は恐ろしい者ぢやないか。べちや〳〵しやべつても實際てないと人は承知せぬからなア。禪宗坊主がシヤベつて人の爲になろうと思ふ樣ぢや禪宗の飯は食へぬぞ。顏さへ見れば人が信念を起すと云ふ風てなければ駄目だ

八一　二十分間に百八十萬圓

師各宗會議より歸庵。晩餐の時侍者に云つて曰く。今日は二十分間に百八十萬圓の仕事をした。大菩提會の內相談に。已れが今の樣に坊主自身が佛を信ぜずに居て。信じて居らぬ世間の者から中々二百萬圓は貰らへない。ドウても其仕事が仕度いなら。先づ〳〵二十萬圓位にして實踐躬行てやつて見るのさ。其の上出來るなら千百萬でも一億でも。こんな結構な事はないと云つたら。色々云ふ者もあつたが。トウ〳〵其の談の通りに議決した。此の二十分の相談て在家の人は百八十萬圓たすかつた……。なァに世辭坊主の食物になるのサ。

八二　石屋の事は不案內

師一日松方伯を其の別莊に訪ふ。將に歸らんとするや伯慇懃に門送し。庭前の苦むしたる石を指して曰く。此間耕雲和尙が見えた時。此石を非常に好い雅味があると賞められたが。あなたは何と思はれますと問ふ。師曰く峨山は庭師や石屋の事は一向不案內てす。

八三　念佛の法話

師濃州本堂寺の大法會に招請せられ。一衆二百餘員と共に三週間の會を結び臨濟錄を提唱す。一日講畢て參詣の信徒に說て曰く。皆さんは眞宗の檀家ぢやさうなが。何んても念佛一口唱へるにも。一心不亂でなければいかん。昔或處に大層念佛を唱へる婆さんがあつた。朝から晩まで立つにも座るにも。只南無阿彌陀佛を唱へて。お寺參も怠らず。世間ても念佛婆と云ふ綽名を付けた位てあつたが。其れが死んてからドウしたものか。地獄の黑門へ引張り込まれたのて。婆さんは驚き。私は婆婆に居た時いつも念佛を唱へて。念佛婆と云はれた者て。其念佛を車に一ぱい積んて參りましたから。ドウか極樂へやつて下さいと賴むと。鬼共が其念佛を唐箕にかけて見ると。アア丶孫が小使する南無阿彌陀佛。オウそれ〳〵火が燃へてる南無阿彌陀佛。オウあぶないあぶない南無阿彌陀佛。オウあつい南無阿彌陀佛。今日はふらい南無阿彌陀佛。ア丶それオウ

これ南無阿彌陀佛〳〵と。臺八車に十ばい許りもあつた念佛が。皆精ばかりであつたから。ボツボツと飛んで仕舞つたが。最後に何か唐箕の底てゴト〳〵云ふものがある。鬼共が詮議して居ると。此婆さんが婆婆に居る時分。或る夏の日の事だ。杖をついて何時もの如く。お寺參りをする途中廣野原を通りかゝつた。時に天が俄かにかき曇つて雷がひどく鳴りだした。此婆さんは非常に雷の怖しい性分であつたから。大層こわくなつて來たので。一心に念佛を唱へながら歩いて居つた。雷は益々烈しくなつて。ガラ〳〵ぴしやッと落ちた。其音に婆さんは思はず南無阿彌陀佛と一生懸命に一聲唱へて倒れてしまつた。此一聲の南無阿彌陀佛の功力に依つて。地獄が忽ち極樂と變じたと云ふ事がある。皆この通りだから一心不亂と云ふことが大切ぢや。口先ばかりの念佛なら百萬だら唱へても糞にもならぬ。皆さんも折角お寺參をし念佛をするなら。何んても一心にやるがよい。又念佛許りぢやない。何をやるにも一心が大切ぢや。役人は役人百姓は百姓坊主は坊主と。銘々一心に其職を守るがよい。兎角今の世は上べばかりて。一心こめてやる人がないから。何をやつても碌な事は出來ぬと。

八四　峨山は峨山

師曾て東京道生會に臨まんと欲して途名古屋を過ぐ。偶々美濃勝川青山家に葬儀あり。犬山瑞泉寺無學和尚を請せしに。和尚病ありて果さず依て敎を請ひければ。京都の峨山和尚東上す。宜しく名古屋に出迎へ之に賴むべしと。某依て多くの從僧あるならんと思ひ。駕三丁車數輛を仕立て待ち受け居たりしに。師は弊衣只一人の侍者を具して卒然某が家に到れり。某大いに禮を盡して待遇す。葬儀了て將に歸らんとするや。某駕を進めて休まず。師駕に乘らんとし僞り誤つて倒る。人皆之を笑ふ。師平然として曰く峨山は峨山駕は駕ぢや。二つになるは當然ぢや。此んな物を持つて來るから惡いのだと云つて。又飄然として去れりと。

八五　佛骨奉迎

佛骨の將に京都に着せんとするや。菩提會々員某。天龍寺に到り師に謁して

乞ふて曰く。明日愈彼の佛骨が着することになりました。就ては貴道場の雲水衆にも靈龕をかつひて頂きたいと。師曰くウム。眞箇の奉迎なら雲水どころか。吾れが一番先に草鞋がけて舁ぎに行くが。イヤ正使だとか副使だとか。總理だの何だのと云つて。馬車や人力に乘る樣な付合には。吾れは勿論雲水とて一人もやることは出來ぬ。マア能く考へて見るがよい。信者の汗や膏で。馬車や人力なぞに乘て濟むか。ソンなことで奉迎したつて釋迦は喜はぬわい。

八六　土方の手傳

本堂再建に着手するや。師は時々自ら材木を運ひ石を擔ひて。人夫土方の手傳を爲し玉ふ。衆之を傍觀するに忍びず相代らんことを乞ふ。師輙ち曰く此大普請に吾れが傍て安閑と見て居る樣てはいけぬ。矢張人足の仕事もやらねば駄目ぢや。然し貴樣等は用はない。精出して骨折れ。伽藍再建は峨山の役目ぢやと。遂に之を許し玉はざりし。

八七　仕事の秘訣

師一日某に示して曰く。仕事の秘訣か。夫れは何事もない只根氣さ。根氣さへ强ければ何事でも天下にやれぬ事はない。今の人間は意思が弱ひから。一寸シクジルと直に眞青になりて仕事を止めるから駄目だ。禪宗の修行などはまた格別だ。大乘根の者でなければトテモやれぬ。古人は二十年三十年と身を恭石に磨りみがいて修行したのだ。今の人間の德の發しないのも無理はないのだ、何事でも確乎たる信念を抱ひて目的に向つて突進するさ。區々たる世間の評判や名譽に束縛せられて居ては駄目だネ。己は何も別段出來たことはないが。兎や角今日まで初志を曲けずに貫いた。人は妙な者で。眞面目に根氣能くやれば。何時かは目的を成就することが出來る。眞面目でなくてはいけぬ。自分信じて眞面目にやれば。今まで敵のやうに思つて居た奴も。遂には自分を信用して却て助勢して呉れるやうになるのだ。天龍寺再建なども。おれは只眞面目に根氣よくやつたのだ。お前も仕事をするなら。眞面目に根氣よくやるかよい。兎角

根氣が成効の本さ。

八八　佛樣には遠慮は無用

師の最も懇意なる醫某一日來診す。師苦熱の激しき爲め病床に大あぐらをかき。さア見て呉れと。醫曰く此の大患にさうして御いてになつてはいけません と。師は莞爾としてア、よいから見て呉れ。醫曰く遠慮のない佛樣には困る。師語を續て曰く佛樣には遠慮はいらぬぞ。

八九　月に燈火は不風流だ

師は夏の夕べ常に暗室に坐し。默然と好嗜の煙草吹きつゝ嵐山の月を賞して。大衆の獨參を聞き玉ふ。衆暗室を心當に。平生師の居玉ふ處に向つて三拜し。將に見解を呈せんとするや。師は却て其後に在りてエヘンと一咳して。時々其機を奪ひ玉ふ。侍者大衆の困却を慮り。折り節し燈火を進むれば。月に燈火は不風流だ。些少の事でも不陰德してはならぬ。皆の者が眞暗で困ると云ふのは。

畢竟目で物を見るからだ。耳で物を見さへすれば。見と不見は明暗に何の關係もないのだと敎誨せられたり。

九〇　初志を全ふせよ

師一日茶禮の序を以て衆に垂示して曰く。カウやつて修行して居る者は。何でも初志を貫徹すると云ふことが大切ぢや。修行中は名譽だの利益だのと。ドンな好い事が山ほどあつても手出しをしてはならぬ。手出をしては駄目ぢや。うむ。手出しをすると夫に奪はれる。吾もナア。十七の時義堂に離れてから伊深へ行て。今日まで何一つ出來た事はないが。唯初志をドウなりコウなり守つたお蔭で。マアこうやつて皆の托鉢の膳をかぢつて居れるのだ。何でも如此して佛袈裟を被して居る以上は皆法の器だ。若い時は二度ないから一生懸命に骨を折つて初志を全くするがよい。若しも誤て已が身に創をつくれは。法に創をつけるといふものだ。サウして見ると決して粗末にはならぬ。

九一　天下にやれぬ事はない

廿八年以降戰後の經營其の當を失し。財政大に困難を來し朝野沸亂せり。伊藤博文其任に堪へずして內閣を松方伯に屬す。伯辛苦經營。漸く財源を求めて之を實行せんと欲して猶未だ決せず。蓋し朝野の攻擊を恐れてなり。偶師の來訪あり。伯師に向つて曰く。戰後の經濟殊の外難澁にして實に困却して居ますと。詳に其所以を說く。師は只うん〳〵と云つて聽き居たりしが。談了るや否や。こんな時は誰か出ても矢張り六つかしい。然し其の局に在る者がシッかりやらねば駄目だ。ナニ身を以て奉公する決心さへあれば。大臣が二人や三人打殺されたつて何てもない。生命が惜いから何でもやれぬが。生命を捨つると云ふ氣でやりさへすれば。天下にやれない事は一つもない。死ぬ覺悟でやりなさい必ず遣れると。伯此に於て意始めて決すと。

九二　龍淵和尙の談

峨山は骨格が近代の羅山和尙に似て居たナ。天龍寺ではマア關根和尙以來八十九十の雲衲が輻輳すると云ふことはなかつたが。實に高德な和尙さ。吾れが鹿王院に留護して居た時。義堂和尙は遷化になる。峨山はまだ小供あがりであつたが。十七の時だ。美濃の伊深へ修行に行きたいと云ふから。合羽に脚胖網代笠袈裟文庫と。雲水一と通りの支度をしてやつた。スルと峨山の云ふには。何んぞ本を一冊持つて行きたいが。全體學道修行の始めから大事了畢の曉まで。用に立つと云ふ本は何がよかろうと尋ねた。吾れは覺へず冷汗が出た。其れて東嶺和尙の無盡燈論がよからうと云ふて持たせてやつた。吾れも前途を思ふのて翌日嵯峨の村外れまで見送るつもりて。話し話し三條の千本まて覺へず行つて。ヤアえらい處まて來てしまつたが。此處て別れとしやう。隨分道中大事にと云ふて西東に別れて二三歩行くと。急においおいと呼ぶから顧みれば。峨山眞面目になり聲を勵まして。無事に修行して歸へつたら。必らず老兄の補佐をしますと云つたが。吾れは再び冷汗が出た。

九三　洞宗和尚の談

峨山老師は此處(伊深)に居て直日をして居る時分。人の捨てたる褌子を洗ひ置き。月夜には人知れず後門の下駄を集めて鼻緒を立て直し。雨の降る晩は雪隱の雜巾桶を兩垂下に置て。水が一杯になるまて坐禪をして。一杯になると雪隱の掃除をせられた。己れは之れを見て覺へず寒毛卓堅した。潛行密用と云ふは此人の事ぢや。其德一世に高きは不思議てない。

九四　藥師寺老尼の談

最初峨山樣の鹿王院へおいての時は六つてありました。師匠と私と四人連て。峨山樣は僕に負はれてゞした。太秦まて來ますと僕が。坊樣は大層重いなア。ちとお歩きませんかと云ひましたら。お前は何の爲に來たぞとお叱りになりました。或る茶店に大きな石榴を賣つて居るのを見て。あれを買ふて呉れたら歩くと云はれましたので買ふてあげましたら。非常に喜んてッイ〳〵鹿王院まて歩いて見へました。直ぐ義堂樣のお居間へ參りますと。峨山樣に坊の在處は何處かへとお尋ねになりますと。坊は在處を忘れたと答へられました。義堂樣は手拍つてよう云ふたよう云ふたと繰り返してお喜こびになりました。

九五　井上氏の談

私は非常に老師の恩顧を蒙りまして。お話も屢々承りましたが。一々記憶して居ません。又大抵新聞雜誌に出ておりますが。今一二お話し致しましやう。兼て私に筆を造つて呉れいとのお頼みでありましたが。暇がなくて造らずに居りましたら。新聞に御病氣と云ふことが出てありましたので。お見舞に伺はねばならんが筆が出來ないので思はず遲れまして。漸く先々月の二十七日に筆を持つてお見舞かたゞ伺ひましたら。お寢みになつておられました。老師がこへ來いと云はれましたので。枕元に行て筆を差上ますと。三本の中一本は大層お氣に入りましたと見へて。能く出來たと御滿足の樣てした。暫らく經ちまして己れが死んだら此筆は香典に呉れいと申されました。その時も大分御重病

のやうに見受ましたので。長くお話を承はるも如何と思つて直に副司寮へ下りまして。己れが死んだら香典に呉れいと云はれましたが。一體此度の御病氣はどうでしやうと副司さんへ話して歸りましたが。其れから五日目に遂に遷化になられたので。先の言葉と思ひ合せて見ますと。御遷化のことは前より知れて居たのかと思はれます。

或時老師は大層角力がお好きだと人が云いますが眞實で御座りますかと尋ねましたら。ウン己が伊深に修行して居る時。雲龍と云ふ角力取が來た。其れは斯ういふ譯さ。東京の回向院で出世の大角力があるから。一番出世しようと思ふて登る途中。下の村で正眼寺の坊主が角力取ると云ふ事を聞てやつて來たのだ。回向院の出世角力に登る奴だから中々強い。始めは大衆の中で強い者が出て交り合てモンて貰つたが。誰一人勝つ者はなかつた。其れて八釜しく己れに取れと勸めるので。一番取る氣になつてやつて見たら。幸に己れが勝つた。そこて雲龍といふ角力取は。坊主に負ける位ては東京に行つても駄目だと云つて歸國したさうだ。全體此れは己れが勝つたのてはない。中々彼は強い。己れなどが三人や四人一時にかゝつても迚もいけんのだが。彼の時は朝から大勞の者と取り詰めにとつて。疲勞れて居る所に己れが行つたから。彼が負けたのサと云はれました。何事でも謙遜して功を他に讓られる御方でした。普請なども隱居のお影で出來たと云つて居られました。

或時短冊を持つて行きまして御染筆を願ひました。尤も此れは人から頼まれたのでありますが。實に其人の座右の銘とも云ふ句でした……「さがろほど人は見上ぐる藤の花」といふ古句でありました。此人は性來なか〳〵傲慢な人て。少しばかりの官位を鼻にかけて。碌に頭も下げぬと云ふ風て。謙遜などと云ふことい知らぬと云ふ位の人てす。其時のお話してありました。此頃の者は我慢が強くていけん。少しばかり學問すると直にそれを鼻にかけて人を馬鹿にする。官位が高くなれば官位が鼻の先にふらつく。金が出來れば金が鼻の先にぶらつく。其れて腹の中はドウかと云へば虫ケラにも劣る。妾を持つたり相場をしたり別莊を構へたりして非道なこと計りやつて居る。こんな人が上に立つ樣ては道德は決して行なれるものてはない。日本も駄目ぢや實に忌々しくてならんと

云つて慨嘆せられました。

それから進むを知つて退くを知らざるは野人なりと云はれたことがありました。此れも此頃の人は退くことを知らぬてはいけん。何をやるにも退くと云ふことが大事ぢや。古人は進む時にはドシ〳〵進んで。退く時はズッと退いた。今の大臣などは少し政治が遣りにくいと。何にかにつけて辭職する。こんな不親切なことはない。こう云ふ時はズン〳〵進んでやるが大臣だ。其れに國家が無事太平の時は退きもせずに何處までもへバり付て居る。少し議會でも噪ぎ立つと直ぐ辭職だ。意氣地のないも程があると。

これも老師のお話しのてたが。此頃或家に行つたら。昨夜賊が這入つたと云つて大騷ぎして居た。一家の主人たる者は目を八方に配つて拔け目のない樣にせねばいけん。拔け目があるからッイ賊も這入るのだ。賊は愼家の門に入らずと云つて。愼み深い家は能く行き屆いて居るから這入ふと思ふても這入れぬ。賊ばかりではない。番當が金を遣い込んで帳尻を胡麻かすのも。息子が道樂するのも。主人が行き屆かぬからである。何でも愼むと云ふ事が大切だ。用心するがよいと云はれました。此事などは私は大いに感じました。一家の上に取ては實に大切なことゝ思ひます。

九六　加藤師の書柬

小弟天臺より出てゝ初て拜席。參學の日頻りに法身を說き。橫說竪說良や久し。師僅かに口を開きて。汝が所說は口耳四寸の法身のみ。兎角敎者は法身の邊りを說くものかと。次の日擧山の衆托鉢に出でし後。師出てゝ手から畑の邊の草を刈り。炎天焦くが如きをも氣附かぬものゝ如し。其外出の大衆を思ひやり玉ふ法愛の深きによる事明かなり。小弟は夏ながら寒毛の卓竪を覺へ候。小弟天臺に歸らんとして請暇の拜に出づ。師咫尺に近づけて。看經可なり坐禪可なり。唯だ心得よや看經は法財を聚め得るも。法燈は坐禪にあらずんば點ぜられざることをと垂誡を給はり候。

九七　見臺待者

東京に於て居士相謀り道生會を設け。前天龍滴水老師を拜請して接心會を結ぶ。明治廿九年十月峨山老師は侍者となりて來り臨まる。師は是より數年前已に印可を得て天龍僧堂を督し。百餘名の大衆を隨へ居らるゝにも拘らず。平然として見臺を捧げ出て來り。之を講座の前に周旋し。侍者の役を勤めらる。世の尋常名聞を貪る輩には。決して爲し得ざる所なるを。聊も辭む色なきは。老師の胸中卓落洒灑たるを知るに足れり。

九八　近きに苦衆生あり

滴水老師既に老年に及び。峨山老師道生會の接心を引受して全生庵に出席せらる。明治卅年十月五日は休講の日なり。然るに當日庵に到りたる者は江川鐵心、森田貫一、梅子尼、鈴木信仁にて茶などを　し居るに。老師は卒然諸氏に向ひ。近傍に苦しめらるゝものあり之を救ふべしと。諸氏は何事を曰ひ玉ふかと思ひ之に應ぜざりしに。老師は我往て自ら索めんとて行かれければ。諸氏も不勝々々に隨ひ行きしに。庵室より凡五十間隔りたる墓地の境に。一つの小蛙蛇の口中に在りて大に苦惱煩悶するを　出したり。人心中一點の陰翳なきに於ては。事物の動靜は來りて自然に感通するものたるを覺ゆ。老師平生の襟度瀟然として虛靈なるは。此一事に於ても之を知る事を得たり。

九九　小山氏の談

御存じの話かも知れませんが。峨山樣が八九才の頃。或晩私しの家にお越しになりまして。オイおれは螢が取りたくてならぬが。螢を取らせぬかと云はれました。其れて種がらを竹の先にくゝり付けてあげますと。暫く經つて螢を左の手に鷲掴みに掴てお歸りになりまして。私の前にヌッと出して螢が光るか佛が光るかと云はれたので。私は妙なことを云はれると思つて今に忘れません。

確か峨山樣が十二三才の頃と思ひます。正月の餅を搗いて居りましたら。チョコ〳〵と表からお越しになつて。オイおれに餅を搗かせて呉れぬかと云はれました。サアお搗きなさいと申ますと。直ぐに一臼お搗になつたので。砂糖を付て差上げましたら。己れは餅は喰いたくない唯搗きたいのだと云つて一つも

召上らずでした。尋常の小供ならば搗くより先づ喰べるのですが。峨山樣はアベコベでした。

義堂樣の御遷化になつたのは確しか峨山樣が十六七の頃と思ひます。義堂樣も中々嚴しい御方で。貴樣が名僧知識にならぬと食い殺すぞと時々云はれたそうです。其れで峨山樣も吾れはどうがなしてゑらい者にならねばならんと始終御話してしたが。遂に義堂樣も御遷化になられたので。大層お力を落されて。吾は丑の歳だから師匠を突殺したかも知れんで。ゑらい者になつて御斷りせねばならぬと云はれましたが。丁度其時分虛空藏樣に丑の時詣りをする者があるとの評判で。二十五六日も經つと鹿王院の禎さんと云ふ噂さが。誰云ふとなく高くなりましたので。私も不審の餘り之を探ぐつて見ますと。斯う云ふ事で。義堂樣が御遷化になられたに付て。外に嚴しい師匠がないので。ドウか好い師匠を得る樣にと。一ヶ月ほど毎夜丑の時ごろ人に知られぬ樣に御詣りになつて。滿願の夜渡月橋から觀音經を流されたさうです……。ハイ其のお經は日々指から血を取つてお寫しになつたさうで御座ります。

一〇〇　無隱居士の談

余の初めて師に參するや慢幢隆々たるものあり。遙かに隔つて一禮するや。早くも師に一拶を加へらる。二回三回に至りて全身冷汗淋漓となり。四回に至り擬議せんとする時。忽ちピシヤリと一掌を與へらる。其機鋒の峻嚴惡辣此の如しと雖も。畢つて禮拜し歸らんとするや。オイ此間作つた詩がある。一つ直しておくれ今度は己れが頼むと。恰かも溫風の面を吹くが如く。檎縱實に自在を極む。

他の師家に參ぜし時は公案が透つたやうな心地がする。師に參ぜし時は公案がバシヤ〳〵と崩れてしまう。世間で他の師家は佛を作り峨山は佛を奪ふと云ふが實にさうだ。

一〇一　時計持と鎖持

居士某曰く。師の堺の南宗寺に居られた時。平常用ひられし時計の紐は紙捻

りてつたが。一日老師の不在中に其紐を立派な鎖と交換して置いた。師歸來一見笑ひながら元の紐はドウしたと。ヘイあれは私しが羽織の紐に替て貰ひます。ハヽア今の人は時計持てなく大方は鎖持ぢや。ドンな奇麗な鎖を附けても。ネヂ卷くことを忘れては用をなさぬ。朝の八時が十二時になつたり。一時の會議が日の暮ぢや。其んなズルイ奴に限つて鎖ばつかりピカつかせるのさとお示しになりました。實に老師は時刻の間違ひをなさらぬ御方て。私は之を忘れぬ樣に一世一代羽織にも紀念の紙捻をつけて居ます。此の御示しばかりは生涯受用しても盡きませぬ。

一〇二　不實と不德

私が此春の大法會の時相見に行きましたら。某和尚師と對坐し峨山さんは實に大德だ。吾等はドウ不德ていけん。隨身の雲衲は僅に八人か九人。何をやつても思ふ樣にゆかんと。師失笑して曰く。おれは不德だ不德だと恐癡こぼすやつは大きらいだ。不德と云ふことは不實だと云ふ異名だ。法に不實だから不德なのだ。自分が不實な修行をして置くから。修行する雲水が不實なのだ。人に不實をすると人が吾に不實だ。貴公は吾れの處に來るといつても己れは不德だと云ふが。不德と云ふのは自分の不實と云ふことを白狀するのだ。人が色々と惡口云ふのも人が用ひて呉れぬのも。皆自分が不實だからサと喝破せられました。實に手ひどい挨拶だと思ひました。

一〇三　南涯居士の談

余一日廣瀨宰平翁を須磨の別業に訪ふ。坐に峨山和尚あり。其談ずるところ一場の世話に過ぎざれども。趣味津々として盡ざるものあり。曰く人間四十といふ年頃は最も多方面に働き。善く萬事役に立つべき時なり。先づ僧家て云へば小僧の役ても番僧ても和尚の代ても皆相兼て出來得るなり。商家て云へば丁稚手代番頭は申すに及ばず主人の代となるも。人が承知して受て呉れるのは四十位迄劫を經たるものならざるべからず。されば我天龍寺の再建も恐禿が最も働き易き時て仕合てあつた。然るに五十六十と云ふ年になると自から立働く時

代は過去り。坐して人を使用し監督するといふ風にならねばならぬ。老功を積み貫目のあるべき年輩者が。壯丁の樣にバタ〳〵立働く樣ては。老功も貫目もあつたものてない云々と。如何にも和尙の言の如してある。余も丁度四十代今が働き盛り。親は老ひ子はまだ小さく一家の運命を一身に負ふものなれば。是非に働かざるを得ざる境遇に立つものてある。故に此の和尙の言は深く味あるを感じ。今に記憶に留めてれざるなり。

一〇四　文明とコロポン

師曾て大阪拈笑會に臨みて寒山寺に在り。一日提唱並に聽參を終へ二三の居士と清談數刻す。曰く此間京て鐵砲打が烏を取るのを見たが。ナンと可笑しいものぢや。烏がコロと落ちてから。暫らくしてポンと音がする。文明と云ふやつはウッかり出來ぬテ。見なさい近頃のやつらは斷りもなしにドシ〳〵惡い事をして置て。後から謝まるのが流行ると。時に沙彌某眠けなる眼をこすりつゝ出て來り。老師もう寢かして戴きます。師曰くもう寢て來たのぢやろう。お前もコロポンの方ぢやナ。

一〇五　捨身の試驗

師大法會の時寮元を召し垂示して曰く。お前が今度は典座だそうな。工合よくやつて呉れ。大勢集めて御馳走しても飯が一番大切ぢや。千人近ひ飯を日々炊くのだから隨分骨が折れる。何ても他の人には目立つた遣り好い仕事をして。上の者は目立ぬ處て。人のいやがる肝心の仕事をする樣にすれば萬事うまく行く。元より身を捨る修行だから。斯う云ふ時にドノ位迄此身が捨てられるか。此身の捨て加減を驗めしてみい。供養も種々あるが身を以て供養するのが第一ぢや。古人も「憂き事の猶此上につもれかし捨し此身をためしてや見ん」と云た：……。

一〇六　禪坊主と角力取

師一日垂示して曰く。撾太鼓にふと目をさまし。明日はどの手てなげ樣やら

と。角力取位でも本分の爲めには實に油斷はない。殊に無量劫來業障の絆を打切ると云ふ此修行ぢや。熱い寒いに奪はれ。眠たい食たいにケッついて居る樣な。ヤニコイ事では。禪宗坊主の中間入は出來ぬぞ。世間のやつ等は大抵衣食住の丁稚だ。衣食住の丁稚で此生涯を送る樣なら。一そ還俗して車夫にでもなるがよい。

一〇七　質素と實情

滴水禪師津送の翌日。師新聞を侍者に示して曰く。是を見よ。新聞屋も吾の腹を知らなんだと見へて。昨日林丘寺へ來て誰にこんな事を聞たか。馬鹿な奴だ。禮式だの古法だのと下らぬことを書きならべて。おれは何でも世間の者が華奢に流れて孝道と云ふことを取り違へて居るから。只恩師を哀念して實情を以て野送りしたのだ。古式だの禮法だのと云ふことは更に關はぬのだ。大衆の中でも。大地の大和尚もあれば會葬者の中にも大家の主人や息子もあつたが。皆この寒氣を厭はず。雪どけの泥海を。嵯峨から修學院まで三里もあらうに屢辨當て行つて。幡蓋。大燈籠。靈龕と。皆がいやな顏もせず擔ひて呉れて。おれは嬉し涙が溢れた。おれは初め斯う云つたのだ。師恩報謝の爲め孝道を重じて會葬するなら。俗人でも車に乘る樣な者は會葬するに及ばぬと。可愛さうに江川鐵心の家內迄鞋ばきだ。生れて三町より遠くは徒步て行つた事はないのだが。昨日はあの路の惡い上に。非常に寒かつたのをも厭はず。能く步いて呉れた。其れは如何にも殊勝に思つた。今の葬式は追孝と云ふよりも。世間をかざる方て全くうはべのみだ。實情などは更にないからな。龍安寺の登り口て。車夫を待せて置て。洋服着た利口さうな鬚のある男が。涙をこぼして手を合せて見送つて居たよ。實情の人を感化するのは大低こんな物だ。何事でも實情でないといけぬ。新聞屋も新聞屋だが。談した奴も談した奴だな。つまらないことを書き立てゝ……

一〇八　慈悲松樹に及ぶ

師は天龍寺の境內に多くの楠を栽へ。昔し臨濟は松を栽えたが。おれは楠を

栽へて天龍寺の繁榮を千年の後に計つてやると。時に雲水等の佛に供せんと欲して若松を折り取る者あれば。師は衆中に於て揚言して。成長すれば棟梁の材となる者を無心に折り取る馬鹿坊主があると誡められたり。又侍者某一日師に從つて遊山の次て。若松を折り取らんとして師に是非を問ふ。曰師く。馬鹿を云へ世界中を自分の身體として法身の修行をする者が。さう云ふ事をすべき者ではないと叱斥し玉いき。

一〇九　女史に三十棒

師東京全生庵に在りし時。一日華族女學校の某女史謁を乞ひ。口角沫を飛して頻りに歐洲各國の文明及び國風宗教等を說く。師默然として之を聞く事殆んと三時間。女史去つて後侍者を顧みて曰く。ア奴も三十棒を與へぬと。マトモの女にや兎てもなれぬわい。

一一〇　讀經と淨瑠璃

師一日大衆を誡めて曰く。金襴の袈裟や紫の衣を着ても。腹の中が糞袋ては戮にもならん。此んな奴の讀經よりは義太夫の淨瑠璃の方が餘つぽど難有い。何んても大法の爲め此身體を捨て。他日人天の爲めにならうと云ふ者が。寺を持ちたい金襴の法衣が欲しい。紫の衣をドウぢやのと云ふ樣な拙ない根性は打ち捨て。若い時は二度ないから何んても一生懸命にやるがよい。

一一一　弊衣保存

師は平常絹布を用ひ玉はず。其遷化の際も極めて補綴せる一見雜布の如き綿布を着して世の奢侈を誡め玉ふ。近頃老媼某。師の高德を慕ひ。遷化の際着し玉ひし綿衣を乞ひ之を保存す。某男爵之を聞き。紫の衣を被て陛下と御對坐の出來る身分にして。此の如き衣を着せられしは尊き事なりと云つて學生などに之を告げ。又遠近の志士其弊衣を借りて之を兒童に示し。或は奢侈非行を誡むるの具となせりと。靜屋居士北坦國道其弊衣を納めたる箱に題して曰く。

是天龍寺管長。故峨山和尙。遷化之際所着用。嗚呼和尙學窮釋氏蘊奧。功

德廣大。爲一代巨擘。世之所知也。而朝夕包着精神者。不過此一弊衣。今天龍不願之。而一老婆子能保存之。不亦奇哉。

明治三十四晩春　　靜屋居士記

一一二　師資の禁酒

師性酒を嗜み。曾て伊深の泰龍老師に參學し。同行蜻州和尙と役寮に潛て密に酒を飲み。陶然興に乘じて高談大笑。終に激論を生じ隱寮を驚かす。老師大喝して曰く。役寮て酒を飲む者は誰だと。師聲に應じて曰く。役寮て飲むが惡くは先づ隱寮からよすがよいと。老師も亦酒を嗜めども己むなく師等と相約して一山禁酒の令を布く。居ること歲餘。信徒某之を憐み密に味醂一瓶を老師に貢し以て養老の資となす。師之を探知し一夜老師の在らざるを窺ひ密に之を傾け。殘餘は總て壺に滌き去つて知らざるもの丶如し。老師歸つて後微笑して曰く。峨山めヤル哩と。之より遂に禁酒の令を解く。

一一三　何ぞ俗吏を煩はさん

師曾て大阪拈笑會に遊化す。會員例を擧ちて金貳拾圓を布施す。師之を受け途を枉けて伊庭貞剛を伊豫住友鑛山に訪ふ。貞剛亦旅費若干圓を呈す。師之を破底の杜多袋に納れ。歸山後大衆を饗應せんと欲し。得々として汽車に投じ。車窓に身を寄せ。彼處の山此處の川を興ず。明石に至る頃ろ漸く杜多袋に氣づき。之を驗すれば金は早や飛び去りて影だに見へず。杉本某之を聞き。或日師に謁して次第を問ふ。師曰く。ウム姫路から怪しい奴が一人おれの側に乘つたが。奴は明石て下りた。多分奴が盜んだのよと。某曰く明石て査公に告げて取調を請はればよいに。師曰く金は因緣によりて己れの杜多袋に入り。又因緣によりて杜多袋を去つたのだ。何ぞ俗吏を煩はさんやと呵々大笑す。

一一四　復古の一點張

某一日師に謁し問ふて曰く。現今の趨勢は學術技藝より諸種の末枝に至るま

て改良を加へて速成を旨とす。禪宗も大に改良を施し速成の方なきや。師曰く儒學などに於ても晡。師が子弟を憐むの深きより遂に口傳に流れて。肝心の心傳はお留守になつたのぢや。己れが宗旨は復古ぢや。改良だの斬新だのと道つて行ては。宗旨は棄なしぢや。己れは復古の一點張ぢや。

一一五　新內閣組織

師曾て山縣侯と會す。侯曰く。私などはどうしても佛戒を守ることは出來ぬ。何故なれば。事外交に關すれば。露國に對しては露國に對する挨拶をせねばならぬ。清國に對しては亦清國に對する挨拶をせねばならぬ。故に勢ひ兩舌をつかふことは免れぬからと。師曰く。そんな意氣地のない腹のすはらぬことで。能く總理が出來るな。侯是に於て艴然たり。良や久して曰く。さらば此內閣を和尙に讓り渡すと云へば。和尙は見事內閣を組織せらるゝか。師曰く。固より やるさと。師歸山後人に戲れて曰く。此頃の政事界も存外ひどひと見へて。山縣が內閣を讓り渡すと云ふから。近々東京へ行つて新內閣を組織するかも知れぬと呵々大笑せられけると。

一一六　師と品川子

品川さんか。己は天龍寺再興のことて二十九年か三十年の頃。東京に出て始めて彼の人に逢つた。如何も彼の人の所に行くと。今の役人臭い所は少つともなし。訪問して忙しいときだと。名刺を持つて玄關に出て來られ。折角の御訪問てあるが。今日は忙かしうてならぬが。一體何用だねと問はれる。私共の樣な僧侶は那家行つても。大概はねつけられる方てね。碌なことは云ふては行かぬからね。はねつけられても仕方がない。併し品川さんは決してそんなことはしない。誠に親切な御方てあつた。彼の人が天龍寺に三千圓呉れた時分抔も。私は法衣を着て居らぬと。金呉れと云ふにも云ひ好いが。僧侶に心易うなれば。直に金呉れいと云ふと思はれると。大法に疵が付いて嫌だからと鳥尾(得庵居士)さんにも云つたことがある。又品川さんにも逢つて私は何うもそこらに行つて金を呉れいと云ふのは耐らぬ。私の事をするのてはないが。知らぬものに手を

合せて金を呉れいと云ふのは困ると話したら。品川さんも其れは尤もぢや。一體天龍寺の樣子は如何ぢやと云はるゝから。如何しても差當三四千圓の金がないと運んでいかぬ。左樣か玆に一つ出來る勘考があるがね。左樣てすか出來る勘考があるなら智惠を貸して貰ひたい。是は私が是非返さねばならぬ必要があつて。大阪の心易い所から金を貸りた所が。其れが要らぬ樣になつて。三千圓住友家に預けてある。是は家内の死金にしてあるが。遠からず家内も死ぬてあろふから其れを進せやうと云はれて。私も豫て品川さんの貧乏と云ふことは聞いて知て居るから。此言を聞て快しとして悅ぶ譯にはいかぬ。其れから品川さんは其れじや私は書附を見付けて來なければならぬと云つて座を立たれ。一時間程經つて書附を持つて出て來られ。實は利足も一緒に上る筈てあるが家内も病氣では居るしするから利息丈けは免して呉れと云はれた。其時は私も腹が膨れた。否腹ぢやない胸が膨れて仕舞つたね。其れから歸つて林丘寺の隱居(滴水禪師)に其の話をしたところが。隱居も涙を漏して喜びました。其れて天龍寺は出來ることに爲つた。

一一七　又三千圓

又天龍寺再興に付ては。品川さんの遣り方が極く好かつた。三村彌平が瞑目した跡。伊庭貞剛廣瀨宰平の兩人を後見人に賴んて。私は一月の十五日理趣分を讀んてると。品川さんから手紙が來た。それは斯ふ云譯さ。最初三村彌平さんか死んて。住友家の伊庭と廣瀨の兩人へ後見を賴んだ。所か後に品川さんへ財產目錄を差出したるが。前よりは餘程財產が贈加して居る。そこて其の禮義として。廣瀨伊庭にお禮をしなければならぬ。道具て贈つても金て贈つても。千圓より少なからずと謂ふ譯さ。其れて金を贈つたならば。必ず受ける人てはないから。其金を廣瀨伊庭から天龍寺の再興に寄附して貰ふと云ふことて。三村彌平と品川さんの關係から云へば。千圓や二千圓は何てもないから。千五百圓づゝの目錄を廣瀨伊庭の兩家に持つて行つてた。所が兩家ても直ぐ天龍寺に寄附して呉れた。天龍寺ては實に棚から牡丹餅ぢやね。實に彼の人の我を棄て遣つて居る藝は。萬事に就て豪らいものだ。彼の人と話をして居ると少しも

他かぬ。斯うして話をして居る所へ人が來ると。此人は誰れぢや是は斯うぢやと紹介をして廣く關係を持たせる。天龍寺のことを人に話すにも。何うか彌二に金を二十五圓程お呉れかと云ふ。いや上げぬことはないが一體何に爲さる。いや外の事てはない。天龍寺再興に充つるのぢやと。斯う云ふ風に遣られる。

一一八　品川子と須達長者

師更に語つて曰く。昔し釋尊の時分に。須達長者と云ふものがあつて。土藏の四五百もあつたが。施をして仕舞つた爲に何も彼も失くして仕舞つた。或る時須達が他所に行つた跡て。家内は須達の歸つて來てから。何か喰はすものはないかと思つて。藏に行つて見ると一斗桝が一つ殘つて居たから。早速其れを米屋に持つて行つて。是て米をなんぼか呉れむかと云つたら。米屋が三升呉れた。まあ好い鹽梅だ是て二三日は喰ふものもあると云つて喜んて歸ると。佛の十六弟子の一人。須菩提と云ふ遣り手が托鉢に遣つて來た。須達の家内は佛樣の御弟子だから早速一升施した。暫く經つと今度は一番弟子の迦葉が遣つて來たから又一升出した。覺へず三升の内二升施したが。まあ跡に一升あれば今日は喰つて行けぬことはないからと思つて居ると。又今度は親玉の佛がひよつくり托鉢に來た。一番隊長が遣つて來たのだから遣らぬ譯には行かぬ。又一升上げた。さうすると最早須達が歸つて來ても炊く米が無くなつた。無ぞ須達が腹を減らして歸つて來やうに。何も與へる者がないと云つて婦人の事だから泣いて居るところへ須達が歸つて來て。何を泣いて居るかと尋ねると。實は是々の譯て三升の米を得たのを皆布施に出して仕舞つて。お前さんに上げ度も一粒もないと云ふ。すると須達は。いや善く施した。己の身體は一夜や二夜喰はぬても何うかならうと。其晩は寢て仕舞ふと夜中に大變藏の中が震動したので。翌朝行つて見ると藏がさつぱり暗く爲つて居る。段々中を見ると。今迄空虛の藏に米や寶が充滿して居つたと云ふ話がある。是は正か佛が魔法を遣ふ譯てないから事實てはあるまい。譬喩にしたものてあらうが。品川さんはそこまて遣るのぢや

一一九　我を忘れてやる

夫れから何でも品川さんに大層世話になつた人があつてな。或る時品川さんが寒中で袷一枚で居るのを見て。氣の毒に思つてか。立派な着物一揃拵へて上げたら。斯んな者が着られるものかと云つて。直くぽんと人に呉れて仕舞つた。我を忘れて懸つて居る彼れ位の人と云ふ者はない。實に今亡くなつたのは惜しいことをした。啻に我の樣な者ばかりを可愛がつてくれる計りではない。世の爲めになることは百難を排して進つてござる。豪らいものぢや。彼の尾張町二丁目の池田合名會社の亭主も品川さんの世話になつたから。品川さんのことは彼れも能く知つて居る。

一二〇　天龍と長州

一番始め相國寺と云ふものが。非常御立退所になつて居つたのを。薩州が上京して島津久光公が奉行所に談判して薩兵の屯所に借受けた。其後長州の兵が上京して。天龍寺を借して呉れと云ふことを云つて來た、當時は天下の形勢頗る穩やかならず。人心恟々たるの場合であつたが。漸やく奉行所に談判をして天龍寺を長州に借すことに爲つた。天龍寺は其時分義堂の先住が病中で。まう亡くなる前であつたから。車などをがら〳〵挽いて來らては迷惑すると云ふので。長州は疊をずつと門内に敷き詰めて出入をした。彼堺御門の戰の前後の形勢と云ふものは。薩長の間が折合はぬて居るし。幕府からは頻りに天龍寺に向つて長州の陣營の模樣などを尋ねらるゝと云ふやうな事が起つて。天龍寺は非常に迷惑をした。併し一々長州の有司の内聽を經て。是丈けのことは知らしても好いと云ふこと丈けを知らした。然るに長州では天龍寺が幕府に内通したから失敗を取つたと云ふやうなことを云ふから。何うも其れは合點が行かぬ。長州が這入つた爲めに。天龍寺は燒討されて酷い目に逢つたのに。長州で不足を云ふ道理はないと云つた。其時分の騷と云ふものは豪らいとて。何でも德川幕府の方からは。大久保と云ふ御目附が出て來て。僧侶の役人たる南禪寺の金地院の大和尙を以て使に寄こした。今日中に退けば可し。若し退かざれば討手を廻すと云ふ達使を傳へた。其れから其の命は承知した。其時義堂は十八日の午后四時頃。我々に向つて是々のとて近日の内に戰爭が起らうと思ふから。己が號令

するまでは狼狽するなと云つて。茶飯を焚ひて喰ひながら。衆僧に其旨を言渡した。私は其頃十二歳であつたから委しいことは知らぬが。決して長州から恨まれるやうなことはないと云ふ丈は知つて居る。御維新後になつてから段々其邊の消息が分つたと見へて。品川さんなどの盡力で天龍寺は長州の力も籍りて再建することになつたのさ。

一二一　脚下が留守

師は空言放談を好まず。一日客某に談りて曰く。今は空言の世の中だ。モチッと進んで實行の世とならねば日本も駄目ぢや。總理大臣始め言ふ事は善いが。實行は一も出來ぬ。ヤレ行政刷新だの。ヤレ財政整理だの。何だの彼だの云つて八釜しい事だが。一も出來た事はない。うひ夫れは其筈よ。脚下が皆留守なんだ。

一二二　寒潭魚躍

師性大に酒を好み一升を傾けて猶且つ平然たり。一日某に戯て曰く。予をして酒を呑ましめよ。一合にして禪機僅に至り。五合にして春風駘蕩たり。飲んで一升に至れば天上月出て寒潭魚躍る。

一二三　牛頭馬骨と選ばず

師一日佛骨奉迎相談會に臨む。委員某師の意見を叩く。師徐ろに口を開て曰く。各宗協議の上とあるから。別に強て反對もせぬが。予一個としては不賛成なりと。斯く斷言して後其理由を説明し。金剛經の若以色見我云々の文を引證し。佛敎の本意は決して色相名字の上てない。一度本領を失すれば。百の佛骨千の舍利も。牛頭馬骨と選ぶ事はない。

一二四　大西郷かな

大接心結了の翌夕。師寮元數名を召して曰く。此頃中は大接心て骨折れたてあらう。己れは今が藥石だ。ヤア一杯飲まさうと抔を與へ。鉢底の薩摩芋を徐

ろに取りて。膳の片端に置き。箸もて左より之を衝き。ウム是て行かねばと右より衝き。ウム是ても行かぬと。更に前後より衝き。役位を一瞥して曰く。此れは誰だ伊藤か。又前の如く前後左右より芋子を衝き。是れて行かねばと膳の下より手を伸して之を擎け。此れは誰だ山縣か。又前の如く四方八面より之を衝き。下より抓んて其れて行かずばと。鷲抓みに上より之を抓み。此れは誰だ……。役位等謂へらく。是れ大接心中の事を政客に托して諷示せる者なりと。双腋より汗を流し肅然容を改む。一僧師の面を打ち守りサア其れは誰てしよう。師微笑を含み大西郷かな。

一二五　中井氏の談

一夕僧堂に宿し。拂曉師に伴はれ滴水禪師の碑などを拜し山内を巡行しつゝ。師は語りて曰く。吾れは毎朝三時頃から起て經を讀み雲水の參禪を聞き。夫より又經を讀んて山内を巡るのだ。嵐山の頂きには有明の月が光て居る。御室の方から西山を籠めて霞がたなびいて居る。京都の人にも此景色が見せたい。又行く〳〵新空氣を吸引するのが。實に心地がよい。京の人などは起ると寢るまて。ほこりばかり被ぶつて居るが。氣の毒な者だと毎朝思ふのよと。私は實に有難く思ひました。其れから私も拂曉に起ることに致し。又老師の弊衣を常に着し玉ふを見て。衣類の贅澤も止めましたが。其後は人の衣類に美を盡し。食物の事など論ずるのを見ると可笑しくなりました。是れも全く老師のおかげてす。

一日私の宅に寄られまして。少年時代の談話がありました。己れが小僧の時四條の橋を渡りかけると。何事かあると見へて。大勢人が群集して寸歩も前へ進む事が出來ぬ。小供心に何ても人より先に行かぬと駄目だと思ひ。人を押しのけて進まんとするも。大勢の中だからトテモいけぬ。そこで一策を案じ出し。兩手を人の肩に掛け。足を擧げて行けと大呼するのだ。さうすると次第に進み始めた。終には一歩も勞せずして橋を渡つた。何をやるにも無理はいけん。無理て目的を達する事はなか〳〵難い。若し出來たとするもドコにか無理がある から必ず破滅する。何事ても同し事だからナア……。

一日處世の方計を尋ねましたら。己れが曾て丹後に小舟で渡る時。ひどい暴風に出逢つた。舟が大層動搖して。乘組の者は皆眞青で。泣くやつもあり叫ぶやつもあり。念佛題目となか〳〵の大騷ぎ。船頭始め舟が覆ると謂つて非常の心配だ。然しこんな時には。念佛題目より有り難い者がある。舟が左へ傾けば人も亦左の方へ行き。舟が右に傾けば右に行くから。舟は益々危險に陷り。吾れと吾が手で死することがある。氣船か又は千石とか云ふ大船なら。逃るべき道もあらうが。小舟の事だから中々危險だ。斯る場合には舟を守る方に注意せんといけん。舟が右に傾けば吾は左により。又左に傾けば吾は右によつて。天色を窺ひ風の通路など見て居ると。其れは愉快だ。念佛や題目より此方が餘程有り難い。此んな時はなア。皆慌てるから遂に舟も覆り身も失ふのだ。此位な暴風は世界に日々吹て居るぢや。世界の大局に居る舟頭は。シツカリやらねといけん。此頃の大臣などは吹き倒されてばかり居るのだ……。なに慌てるからだ。大きな事をやろうと思ふたら。心を靜かに持つてやるが肝心だ。慌てる樣ちや碌な事は出來ぬ。

一二六　公仙子へ垂示

浪華に仙公子なる者あり。前後其師父を喪ひ。頗る哀傷の色あり。師之を勵まして曰く。ワシも十六の時最初の義堂師に分れ。其後次の泰龍師に分れ。今度又た最後の滴水師に分れたが。其たび毎にシツカリせねばならぬと覺悟して。益々道を修めた。今から考ふれば。師匠を取られたのが却て幸てあつたかと思ふ。あなたも重さなる不幸てお氣の毒だが。修業次第て却て幸に轉ずる事が出來る。シツカリやりなさい。

一二七　松方伯に大工を紹介す

師は平生人を紹介するに。必ず其人の長所のみを擧げて之を紹介せられたりき。一日時の總理大臣松方正義師を方丈に訪ふ。時恰かも本堂再建中なりしかば。大工稲垣某。用を具して其庭前を過きる。師之を呼び止めて曰く。おいおい一寸此處へお出でと。稲垣何事かと思ひ形を整へて席に出づれば。師は。松

方さん此男が此度の棟梁だ。なか〳〵能くやりますよ。チト賞めてやつて下さいと。松方座を改めて曰く。夫は御苦勞さん。何分宜しく頼むと。稻垣喜んで曰く。老師樣の御陰て總理大臣に面會して。言葉を掛けてもらつたと。此より更に一段の精勵をなせりと。

一二八　峨山の內佛

師の曾て大阪に至るや。廣瀨宰平を其宅に見る。宰平師の望みに就て一物を寄附せんと云ふ。師曰く內佛なし幸に寄附せよと。宰平乃ち師を促し市內の佛具屋を探がさんとして果さず。後天龍に至り見るに內佛あり。曰くありますなア。ウン其れぢやチツと小さい。乃ち宰平を引きて本堂の燒址を見せしむ。曰く宰平さん此處だ。此處えマア峨山の內佛だから大きいものはいらぬが。ザツと十八間四面位て拵えて貰ひたいと。宰平呆然。遂に之を領す。蓋し天龍再建の發端なり。

一二九　愛宕山登り

弟子某新たに天龍に入り。始めて僧堂に參す。師時に外用の事あり。將に出んとして某を顧て曰く。急ぐか。イエ今日は一日遊ぶ積りです。曰く。ソンなら愛宕山に登てこい。其間にワシも歸るからと。瓢然として往く。某は言の意外なるを感じたれども。遂に違ふべくもあらず。脚絆を副司寮に借り。難關二里登山を終りて歸る途次。具さに辛酸を嘗めて。師の非凡を思ひ。奉事參道の心益々決す。歸れば師既に座に在りて曰く。景色がよかつたらう……。景色どころか足引摺りて歸りて來ました。ウム其れてこそ僧堂に來た價直がある。

一三〇　峨山は變らぬ

師病床に在り。發熱四十度以上。代議士某其大忠を聞き拜趨慰狀して曰く。熱高し尊懷異なることなきか。師音容自如として曰く。イヤ〳〵峨山はチョツとも變らぬ。お前も近日東京に行くだらうが。何でも誤魔化されて變ることの

ないやうにして呉れい。

一三一　ふとい奴じゃ

辯護士鈴木信任。星亭の傲岸不屈頑石も啻ならざるを以て。師に謁せしめて以て其德風に浴せしめんとし。師の東京に出錫せらるゝを待つ。星亭も亦兼て師の高德なるを聞き謁せんとして未だ果さゞるに。師たま〳〵東上。信任星亭を引見せんことを乞ふ。師快く之を諾す。當日に至りて。信任師を床前の緞子の蓆に請し。星の席を次の室に設く。既にして星亭來り見。心中之を喜ばざるも。枉けて其席につき禮一禮す。師溫顏以て之を招き對座せしむ。次に川合清丸來り會し。清談數時間にて互に分散す。師後ち人に語りて曰く。いや星は字義などの事を多く聞て困つたが。幸ひ川合が傍に居て答へて呉れてな。いやア、云ふ男を佛道にても引き入れると。日本國家の腐敗した風氣を澄清するには餘程功がある。それてあの男も暇が出來たら天龍寺に來て坐禪してみたいと云つておつた。隨分あれもふとい奴じやな。

一三二　教育談

某教育上の意見を叩く、師曰く。今の學士とか博士とか云ふ奴は。皆月給目的で教育するのだから大抵知れてるよ。大體教育と云ふことは。口の先きばかりでは默目だ。身を以て生徒を教育して行くことが肝心ぢや。今の教育は口先きばかりの教育だから。進むに隨つて人間は輕薄になり。道德は衰へ。若い者は日に增し墮落して。進むと云ふよりも退くと云ふ方がよいかもしれぬ。國家の役に立つ大人物を造らうと思へば。精神のタシカな奴を造らねば駄目だ。見なさい今の青年の思想の薄弱な事を。本ばかり讀ませたとて何にもなりはせぬ。己れも七八千の雲水を教育して居るが。おれの方ては本は教へぬ。ヂキヅケに大きな腹をこさへてやるのだ。夫て草も取らすれば米も踏まする。托鉢にもやれば柴苅にもやる。座禪のかたはらに活きた學問を日々させるのだから。本は讀めぬでも精神のシッカリした奴は出來る。我國にも本を教へてやる奴は澤山出來たが。人物を造り出す先生がないから駄目だね。生徒を感化すると云ふこ

とは。今の教員ではおぼつかない。

一三三　車は躰裁か宜い

往年各山會議の事あるや。建仁寺門前車を以て滿たさる。師時に天龍寺執事たり。嵯峨より會に赴くに未だ汽車あらず。仍て草鞋をはき徒歩す。會終るや衆皆玄關より乘車し揚々門を出づ。師獨り草鞋もて勝手口より出づ。一管長あり師の風貌を看て。大に呼んで曰く。峨山さん嵯峨からは遠方だから人力でないと困るだらう。師すかさずして曰く。あなたは近邊だから御車で往來なさると體裁が宜しい。管長赧然として去る。管長某後他に語りて曰く。峨山は綿服草鞋。身に陰德を積むが。口では屹度不陰德をする男ぢやと。

一三四　屁一つで天龍寺

師侍者に語つて曰く。己れが伊深から歸て來た時。圓照庵の老僧が天龍寺を建てるのはお前さんだから。ドウか賴むぜと手を合て涙を溢したから。ナアニ天龍寺位は屁一つこけば立ちますと云ふたが。此んな屁はタントはこけんわい。

一三五　三首座感泣す

師示寂の前。大衆大阪に行化す。唯濃州の俊首座と雲州の耕首座とのみ。天龍に在番して師を留護せり。師時に劇熱四十度以上。兩首座忱憂措く能はず。在阪當直讓首座を召還看護せしむ。師莞爾として讓首座の歸謁を見て。之に問ひたまはく。何にしに歸つて來た。曰くあなたの御病氣を見舞に參りました。師聞て大阪の在衆を念とし。讓首座に囑したまはく。己れもゑらいが大阪でも皆がゑらからう。大阪の方が大切ぢや。己れはモウ大丈夫だから。大阪の方の大衆の都合を計て。取締して工合ようやつて呉れよと。讓首座師の病容を視て逡巡去る能はず。師之を呵したまはく。馬鹿な奴等だ。留護の者もナゼ呼びにやつた。容易ならぬ僧侶の大作務に。和尚が病氣だからと云て。大衆を迷はしては濟まぬ。サア〈讓首座は大阪へ。留護の者は留護に各其分に勤てやれと。三首座相見て泣然感泣す。

一三六　一方の大關

師は狀貌偉魁にして。膂力また衆に越ゆ。其伊深正眼寺にあるや。多數の雲衲と共に寺後の山に登り。月明に乘して時々角力の技を試む。或日某衆に計りて曰く。禎兄はたしかに一方の大關じやが。今晩は皆續き玉にかゝつて彼の鼻柱を折却してやらうてはないかと相議して師の到るを待つ。師例の如く後山に到れば。某師に向つて。おい禎兄一番モンデ貰ふと。師曰く。相撲は眞劍勝負だから。一人〳〵生命を捨てゝこい。貴公のやうに人の力で相撲を取らうと云ふたとて。夫は駄目だ。生命のいらぬ奴は二人でも三人でも一時にこいと。左右を虎視して怒鳴りまくれば。衆皆之を恐れ。相目して敢て力を角する者なし。師笑つて曰く。意氣地のない奴ばかりたな。そんな事では大口を開かぬがよいそと。飄然として去り岩上に獨り露坐し玉ひけると。

一三七　錆刀の御仕置

師侍者某に語つて曰く。南宗寺の靖州和尚に參禪をし。又其談話を聞くと。剃刀でスコッ〳〵と剪らるゝ樣な氣がするが。おれの處へ來ると。錆刀でゴシゴシとけづり落さるゝ樣な感がすると云ふ男があるが。おれはさう意地が惡いかな。侍者曰く。老師が大きな手を双方揃へて。顏を撫しながら。お前まあ考へて見いと始めらるゝ時は。どうしても錆刀の御仕置て。たまつた者てはありませぬ。侍者室に歸りて長大息して曰く。少しの事てまた錆刀の御仕置に逢ふのであつたと。

一三八　師の書柬

自恃言行錄高橋健三氏の中に。老師が自恃居士の病を小田原に訪はれし時の話しあり。曰く老師出立の時夫人旅費を呈せんことを諮らる。予居士の門人(其の儀に及ばずとなせしに。先生(居士)之を心なきことゝして安んぜざるの狀あり。乃ち師が先生の膳の高く廣く堅牢なるを愛されたれば。之に倣ひ製せしめて寄附せんことを乞ひしに。先生意を得て自ら脚の繰り方塗り色等の事を指圖せら

れ。小田原に得ずして京都に注文せしが。問もはく先生の膳は紀念の遺品として師に贈ることゝなれるぞ悲しき。其の時小田原で出來兼たれば已むなく寸法を記して老師に託し。京都にて摸製せしむることゝなせしに。何分實物を見せずに造らせること故。如何に間違ひてがべラ棒に大きくなりしとて。三十一年六月二十日付師よりの書翰に。

（前略）扨此度之膳十八日出來。何てもと半月餘り前より樂居候處。托鉢僧持歸り。直樣一見實に驚入候如何となれば。大きく高過ぎ。黑ヒカリ過ぎ。先づ大佛樣の供養膳なれば然り。吾輩之麥飯僧には羞入候に付。其儘佛具用に直し置候。此度之事。實に一學問に相成。兎角空論の用を不成事實見。度を過すは失策之第一。生愚古諺に長持枕にならずと注意有之事相忘大失策。面白き學問仕喜居候。何れ秋來拜眉萬々申上候。此十五日より二十一日迄大接心之爲。禁酒致居候。明後晩は澤山頂戴と樂居候へども。是亦度を過す時は後悔の種。隨分問々有之。將來は少し相心得申度事と存候。來る二十三日より大阪拈笑會行。右の話にて大笑可致と存候。參禪の餘暇忘想之儘相認候（下略）

斯う云ふ事なりし故。後に高樣氏の膳を贈られしなり。其の後竹村氏も同一の膳を造らせしことを話され大笑せしが。其の時二十三日付にて竹村彌平氏へ送られし書翰に。

（前略）先般御來山の砌。三條繩手小川テイ婆子御同席中膳の事御申附。右品來候に付。托鉢僧に爲持候間。受納相成候樣添書仕候。小生の分も出來。己に十八日持歸り一見候に。大きく高過ぎて甚だ不都合。困物に御座候。乘て古諺に長持枕にならずと承知の上。此度之事は大失策。貴下は如何哉。先づ奈良の大佛樣か關の地藏樣へでも寄附致度被存候（下略）

老師の書翰は。いつも戲言中に諷旨あり。何れを見るも世の戒め人の心得とならぬはあらず。右の書翰は東西自恃言行錄にも照應したれば。唯其の一節を記したるのみ。

峨山禪師言行錄附錄

附錄一　訪問記

黑田天外

峨山和尚を訪ふ

巳亥一月二十日濟門の老古錐由利滴水禪師の示寂せらるゝや。余は其逸事を蒐輯せんと欲し普く門下の諸師居士を歴訪し。次て橋本峨山師を天龍寺に訪ひて其示敎を請ひき。時に師は余を座に延き坦懷和夷諄々として語らる。余は少時の間早くも其大德の人を薫化するに服し。懷裡恰かも纊を挾むが如く欣然として辭し去る。

後三寧坂に天田愚庵と語り談峨山師に及ぶ。余曰く師と相語る恰かも照々たる春郊に立て春風に面を吹かるゝが如く。別に峨々たる高處も見へず。また峨々たる激處も見へず。畢究器宇豁大にして那處と模索する處なしと。愚庵掌を

抵し曰く能く窺破せり矣と。

四月中旬櫻花は嵐山嵯峨を罩むの頃。再び師を天龍寺に訪しが。師は其前日錫を飛して濃州に入りしと。依て友と舟を堰川に浮べ。峽間團々の櫻花を賞し。大醉淋漓として歸る。六月に至り余は一書を呈して請教の意を致しき。其後師は返東を裁して曰く。頃日接心法務多しされど二十二日は少間あり相待つべしと。因て同日腕車を驅り。二條停車場より京鐵に投じ嵯峨驛に着し。直ちに天龍寺に訪ふ。

前日より早朝にかけての降雨は漸くやみたるも。雨雲尙ほ低く蔽ひて。境內の綠樹は靑漠々。恰も杜宇啼破萬山靑の概あり。刺を通ずる間もなく一僧出來りて曰く。今お噂をしてありましたと。因て導びかれて座に入る。

師例の如く溫顏坐を與へて相語る。時に湘簾は波紋を織り。机邊には杜鵑花紫白妍を競ふ。師曰く此ようなもの前はすかなだが矢やぱり眼の食物も入用ちや。余曰くやつぱりお年がいつたのてせう。師曰くまあそふぢや。余曰く今僧堂には何人ほどお出てゝすか。師曰く七十ほど居る。何ても日本のつぶれる方に働いて居る者が。善い方に向ふように此れ等の雲納を育てゝゐるのて……。我々宗門は世に擧つてやらすといふ譯にはいかんが。ちと善い者を育てゝをかんと……。むゝ接心は毎月やつて。大接心といふのを三週間やるが。この大接心にて我々が佛祖の骨髓の萬分の一てもと奮發する時てある。

うむ私は京の生れぢやが。未だ私が腹の中にいる時から。親共が生れた子が男てあつたら坊主にすと定ておいたのぢやそうて……。それが私や丑ぢやてな。在家て丑のものは家を突こかすとか云ふのて。其れて坊主にしたのぢや。

それて京都の飯は何程も食はず。岩倉の方へ子に預けられたのだ。うむ坊主になつたのは五才の年て。其時師匠の義堂は雲水の世話しておつた。こりや豪傑だつた。獨園滴水の横面ハッた方て……。うむ滴水に取つては兄分て師匠て……。やつぱり義堂について法を學んだのだ……。こりや明治元年五十二て死んだ……。そりや大きなことといふて居つた。天龍寺再建てもあれが居つたらまだ大きなことに建てるのぢやつたがな。

機鋒は鋭い。滴水を鼓へ叩きこんだ方だ。面白い和尙ぢやつたな。平日は庭

園など掃除せずに捨ておいて。昔は五節句でやかましく云ふたものぢやが。其節句の朝になると。世話の役人が羽織袴て來るので。俄かにやかましく云ふて掃除さす。そこて私等はナマけ者の節句働らきといふは此れぢやと。不平たら〳〵て掃除をしながら「世間の利口上下を着て大小を佩す。鹿王の阿呆箒をかついて掃除を致す」と云ふてると。後ろの椽端に義堂が聞ておつて馬鹿ッと一喝しよつたアハヽヽ。なに鹿王と云ふは義堂か鹿王院にあつたからだ。

それて義堂は町人相手が嫌ひて。いつも來るのは公卿大名武士などだ。維新前のことぢやが。一日一室には薩州の岩下中村などが來てゐる。庭を隔てゝ彦根の貫名の居る。あの家老のな……。そこて和尚が私に云ふには。彼處におるのと此處にをるのと犬と猿ぜい……。

また或時に云ふには。天龍寺は後醍醐天皇にも歸依になり足利にも歸依になり。それて天下の大平を計る坊主に。敵も味方もあるのぢやないと。

私が十六の時に此和尚が沒くなつて。其れから美濃伊深の正眼寺に泰龍和尚といふについた。こりや實に名の如くゆたかて。キッイ方て。どうもあの人等が藝といふものは實に責任を帶ておつた。今死ぬと云ふ際に大衆に遺誡を說いた。聞へんような微かな聲ぢやが。切口上て……。あれて坊主の本分を盡してゐる。そこに十三年おつて其れから此處へ歸つて滴水についた。

余問ふ。過日御談話に和尚が滴水禪師に參禪して契はず。夫が爲め禪師に鳩尾を四度も蹴られて。今ても冬には疼痛むといふことてしたし。其他古來の高僧等にも自ら臂を斷ち。或は左脚を逼折せられ。其他惡打痛棒は常のようてすが。あれ程にせねば道が傳へられませぬか。師曰く。上士は恨につぐ。中士は德につぐ。下士は勢につぐ。こりや世の事てもそうだな。あの場處まて至らぬと向上の事を傳へることは出來ぬのて……。段々經驗するほどあそこになる……。それてなく只千七百則ある公案を。一々調べんならんようては眞に駄目てある。

談は少しく國事に度り。師は慨して曰く。家てしようのないものは家醜を揚けにゆく。あれをどうかせんといかん……。一家の思ひをなして國をやらんと。戰爭て少しく勝ても商法てめちや〳〵になる。其れていつか松方にそういふた

ら。痛い處へ針をさゝれたと云ひおつた……。私の處などは一家と云ふより一人といふ方でこの僧堂は……。

かく云ひつゝ師は自ら起て籠を揚げしが。雨後の山色青更に青く。眼界頓に爽然たり。余曰くこの眺望は實に結構でございますな。師曰くよいぢやろう。

折から一客ありまた座に入る。師曰く。此間運動に弓を彎ひたら。チト肩が痛いようぢや。そこで弓で來たから弓で療治しようと思ふて。頻りに鏢弓をやつたが。ドウもいかん。余問ふ碁は御好だそうでございますな。師曰く碁は止たほうだ。碁も強けりやよいが。

師は自ら養老酒を酌て余と客に與へ曰く。これは此間美濃へいつた土產だ。こういふ瀑布が落ちようものなら。直に僧堂を其邊に移してしまう。そうして托鉢して呉れなんだら。雲衲と一しよに養老酒を飲んでゐるだ。余曰く。酒はお好きだそうでございますな。師曰く。以前は隨分飲だから。美濃から傳言がある毎に。いつも酒を節しいと言ふて來る。其れが雲水などの時は。一度酒に逢つたら今度は何時逢はれると云期限が分らんぬから。其れで乞食根性……。ひがみ根性で飲むのでな。然しもう何時で馳飲ると思へば。そう飲みたくもなく。又隱居(滴水)の死後大に節することにした。余曰く。それでは以前は一升以上も。師曰くモッと……。然しもう此頃のようでは傳言もしよまいアハヽヽ。

談は白隱禪師に及びしに。師曰く。白隱禪師は實に我國禪門中興の豪傑ぢや。ソコに掛てあるのは白隱の書いた達磨ぢや。余即ち起て之を拜するに。筆力豪放にして匆々數筆よく大師の神采を發揮し。上に「いつみても」と書し。之に白隱惠鶴の二字を捺す。只に其畫の稀品なるのみならず。「いつ見ても」の五字。豈に無限の神趣無限の烟波ならずや。余は敬仰之を久ふす。

師は今日は緩つくりしてゆけと懇ろに止められしも。少しく所用あり。午後四時頃同寺を辭して歸路につけり。

十一月念九日余は飄然三たび峨山和尚を嵯峨天龍寺僧堂に訪ふ。時方に午前九時にして。和尚の聲は朗々として戶外に徹す。乃ち靜かに音訪へば。一僧出來りて曰く和尚正に提唱中なり先づ此方へと。余は躍然として僧堂に入れば。和尚は高壇に座し。恰かも碧巖五十四則雲門却展の章を提唱し。雲水居士の侍

座講聽する者八十餘人。余も靜かに一僧の傍らにつき。讓られて碧巖を分觀し諦聽せしが。和尚の聲は高朗豪爽にして。縱說橫說圓融無礙。其儿案一下。眉昂く眼輝き。意氣堂々威風凜々。恰も雲門の所謂氣宇如王の大機を述るに至つては。聽徒が毛髮爪甲の末に至るまで。一種の電氣……眞勇の氣の吹入りて頓動するを覺ゆ。而して竊かに和尚の氣色を窺へば。樂むが如く激するが如く。撫するが如く喝するが如く。恰かも獅子王の其兒を弄するの概あり。二十分許にて提唱終り。和尚は壇を下り侍者を從へて內に入り。雲水は一齊に諷經一回而して散す。余は尙ほ座に據て嗒然たる少許。一僧出來りて曰く此方へと。乃ち和尚の室に入れば。和尚は黑衣を披きながら。座につき。例の溫顏もて余に接して曰く。うむ大分暫らく逢はんようじやな。サアそれへと座を與へぬ。此に至つては和尚も只一團の和氣のみにて。彼の登壇の際の威風凜々近づく可らざるの概あるに類せず。曰く。天龍寺も滿三年かゝつて漸く出來上つた。隨分他ではこういうことて。多少ごたゝのあるものちやが。幸ひ吾衲の方はそんなこともなく。一昨日天龍寺て僧堂と內部は別になり居ると饗應と云ふから。

豆腐位喰せることかと思ふて行たら。大分馳走して呉れた。寄附してくれた重なのは品川北垣烏尾伊庭廣瀨其他大分あるが。再建費用は先づ四萬五千圓程だ。

うむ他寺ても隨分再建せんならん處もあるが。之がなか〳〵面倒なもので。何をいふにも生命から二番目の金を寄附して貰ふのぢやからな。夫れをして貰ふについては。先づ內部から改革してかゝらねばならぬ。假令ば戰爭をするとなれば。先づ平時とは違ひ費用も節する。妾のあるものは妾に暇を出す。女房にも水抔して別れる。而して吾生命を打捨てかゝれば。其人々應分の働らきが出來る。其れを平日のやうに。費用も節せねば。妾も置て居るは。水抔もせぬはとなると。到底戰に出ても格別の働らきをすることは出來ぬ。

此の再建といへば。坊主に取つて一つの戰爭ぢや。そこて再建に取りかゝる前に。吾衲は先づ內部を改革して戰時の心得とし。假令何年かゝろが再建の出來る迄は。食物につき小言など一切言はぬ。そうして草鞋がけて彼方此方奔走して寄附を頼む。そうすると又人も寄附してくれるぢや……。然し人間は弱いもので。そう覺悟して居ても長くなると又同じ麥飯ても。溫たかいのを喰たい

といふ氣になるぢやアハハ、、。それて此寺も先づ再建は出來たが。來年の遠忌までは未だ戰時の心得を解かぬつもりだ……。世間では往々衣食とも平時の通りにして。そして寄附金を募ろうとする。其れて思ふ樣にやる事も出來ず。從つて紛擾が起ることがあるのだと。和尙の此言は深く人情の機微を穿ち。成敗の分るゝ處を明にす。殊に伽藍再建など企つる僧侶の好模範となすべし。

和尙また曰く。まあ此寺を再建したについて。一番の大出來は工事に關して少しも雲水を使用せなんだことぢや。然し夫でも法堂を前にひいたので。掃除をする處がふへたと小言をいふて居るのだと。侍僧を顧み打ち笑ふ。

會ま一客あり。和尙は之に接せんとて室を出去りしかば。余は徐ろに椽端に立出しが小春日和といふべき。日光照々として嵐山は樹間淡煙を含み。畫ける如く前に横はり。庭前一樹の殖楓は爛紅恰も燃るが如し。不圖眼を注げば庭の一隅に大なる撥笠を被れる狸の陶器を安んず。余は面白きものをと思ひ。庭下駄を穿ち籬目清き白砂を蹈みて近づき見つ。又坐に復りて床に懸たる雲門大師外一禪師の掛幅を拜し。再び嗒然として嵐山に對するの時。和尙は入り來りて曰く。やあ失禮。布敎問題に入る。

余問ふて曰く。和尙親ら支那へ御渡航なさるやうに聞きましたが。果してそうて御座りますか。和尙曰く。いや吾禪は初めから行かぬつもりぢや。總督府から禪宗に於て布敎されるなら。年々千圓內外の金は支辨するといふから。夫れて誰か渡航するものがないかと周旋して見たが。一向行こふといふものがない。そこて吾禪も餘り不甲斐ないと思ふて。一層自ら行て見ようかと思つたが。此れは懇意な者があつて。日本の事はとうするのかと頻りに忠告して呉れたので。吾禪も大に閉口した。

尤もこゝて此れならばといふ法種さへ殘せば。峨山一已の身體は何處へ行て。倒死しても關はんが。法種を日本に殘さぬ中は。ソウ吾禪も行くことは出來ぬ。其れて此種といふものが何時ても蒔けると云ふものでない。百姓の種蒔は彼岸に定つているが。吾禪の法種蒔も同樣て。こゝ十四五年は吾禪の彼岸ぢやから。こゝて十分やつて置ねばならぬ。然し夫ともタツて吾禪に行けといふなら行かんこともないが。其時は此僧堂に居る雲水八十餘人を引率れて行く。尤も八十

餘人の中。いろ〳〵の事情もあつて。皆が皆といふわけにも行くまいから。先づ少なく見積つても五十餘人は引率れて。彼國で此方の法種蒔をしながら布教をしてもよい。何も日本でなければ禪を學べぬと云ふのでないから。何處でやつてもよいが。吾禪一人雲水を捨てゝ行くのなら眞平だ……。うむそれて其後もいろ〳〵談話があつたが。先づ八幡圓幅寺の宗般和尚が奮つて出かけることになつた。

うむ星には一度東京で出逢ふた。丁度吾禪が宿つている處から六七丁距つた家で一度逢ひたねといふから行つたが。星という男はいろ〳〵細かいことまて知つとる男て。字義のことまて詳しく聞て困つたが。丁度河合(清丸)が傍にゐたから。河合方へ振向けた……。こうむ星なども何づれ是から國事を擔當するのであるから今の中にちと腹をこしらへて置けば。大きによいと思ふ。其れて星も少し暇になつたら。是非共嵯峨へ來ると云つて居つた。

うむ某國との事情もそないに迫つてゐるかね……。そうか……。然し日本も今こゝても一遍やつて置く方がいゝだろう。

なに庭にある狸の陶器か。あれば醍醐にあつたのを他の者が模造して。そして裏に字を書てくれと云ふのて書てやつたから。其れて吾禪の處へも一つ呉れたのだ。うむあれて燈籠だよ。

あゝ左樣か禪をやると身體が壯健になるだろう……。夫て何事をするにも自在を得るからね。何ても人間は隨處に主となるといふことを解せねばならぬ。隨處に主となる者てないと事業ても何てもすることが出來ぬ……。オゝそうぢや。

和尚は余が酒を嗜むを知りてや。侍僧に命じ早くも齋を出さしめ。共に杯を擧げ且つ飲み且つ語りて曰く。これは托鉢した錢て買たのてない。吾禪が他家から貰つたのだから。遠慮せずに飲ておくれ。吾禪も再建の事もあらまし方がついたから。一遍旨い酒を飲ふと樂しんてゐたのと。其坦懷客を愛する此の如し。

齋飯終り。既に正午を過しを以て。余は厚く和尚に謝して僧堂を出て。更に一僧に請ひて本堂を一見しつ。終つて義堂和尚の法華塚並に滴水禪師の墓に詣て。回つて法堂に入る。是また今回再建せしものにて。堂內寥廓として中央に

佛像を安んず。而して此天井は書家鈴木松年氏が其奔放なる健筆を奮ひ。一大天龍を畫くべき處にして。此畫龍に就ては和尚と松年氏との間に於て。一大佳話の傳ふべきあり。請ふ之を叙せん。

初め和尚は松年の畫名を聞くや。自ら其邸に赴き天井の龍を描かんことを請ふて曰く。子に非ずんば之を描く者なし。若し子にして之を許さずんば吾儕は子の許すまで幾回にても邸を叩かんと。和尚の高德盛名を以て此言をなす。松年の喜び知るべし。依て欣然として之を諾す。其後松年と和尚とは一再往復す。一日和尚また松年を訪ひ曰く。潤筆の價幾許ぞ。松年曰く三千金。和尚曰く諾す。されど吾儕佛家巨資なく。一時清贈する能はざるも。請ふ錫を飛して之を辨ぜんと。松年躊躇思ふ所あり。和尚の正に袖を拂ふて去らんとするを見て急に之を止め。曰く和尚暫らく待てと。乃ち筆を走らし一券を書して之を送る。和尚以爲らく。松年或は之を畫くの期日を約するならんと。手に接して之を見れば。曰く畫料三千圓右慥にに受取候也と。蓋し松年は慨然三千金の證券を贈り。無料を以て之を畫かんとするなり。和尚大に喜ぶ。松年曰く吾和尚の爲に既に法堂の龍を畫く。吾もまた和尚に請ふ所あり。和尚曰く什麼ぞ。松年曰く龍を畫べき天井の大さ二百疊。其筆硯また巨大ならざるべからず。我新に一巨硯を製すれば。和尚を初め雲水の大衆。誦經の傍ら硯墨を磨し。以て巨硯に灑げ。和尚曰く諾す。松年曰く既に揮毫を終らば、願くは其の巨硯を本堂の邊に立て以て紀念の碑となすべし。和尚宜しく爲めに數字を題せよ。和尚曰く諾すと。約成りて飄然として去る。

松年氏が三千金の證券を贈り。無料を以て法堂の龍を畫くと聞くや。富商中井某は其巨硯の資を辨ぜんと請ひ。或は墨汁を磨すべしといひ。其畢を贊する者續々として出づ。而して松年氏は目下揮毫につき經營慘憺中にあり。余が和尚を訪ふの前數日。松年氏は余と同じく天龍寺に赴くを約しき。而して余は興に乘ぜるまゝ。獨り先んじたるが。今や天井を仰視して。そゞろに揮毫の容易ならざるを思ひ。また松年氏の豪膽健筆は。既に其困難を打破して二百疊の大天井。間もなく雲煙迷離天龍騰躍の大作を現すべきを想ひ。佇立凝望之を久ふす。

余や屢々和尚の教誨を受け。而して松年氏とは夙に往來親密なるを以て。特

に書して以て後世書史の料に供せんとす。豈に一時の走筆と謂はんや。乃ち一偈辭して京に歸る。

二偈

碧岩集開講

獅子窟中無異獸。靈龜山上磨爪牙。人來問白雲紅樹。不說東西按鎭鋒。

般若繙讀

董徹片香大千外。摩訶般若擧龍泉。無聲花路眞空境。日暖風淸十月天。

鐵舟居士七回忌香語

在家菩薩武門傑。英氣堂々轟滿天。莫道色身正敗壞。虛空咬齒擧瞋拳。

碧岩集開講

換骨靈方歸熱喝。頤神妙術存瞋拳。雲深溪靜雨餘曉。千尺碧岩霜葉鮮。

同講了

曹源水枯龜峰寢。不識洞庭似昔年。語盡遠山無限話。爐頭枕臂雪餘天。

戊戌除夕

咄哉三界輪回客。三百六旬過夢中。看破東西南北事。雪花一片轉爐紅。

己亥元旦

眞人無位弄無功。柳是綠兮花是紅。且喜山門添境致。森羅萬象一春風。

小室信夫氏拈香

六十年間如一日。風波相對以閑心。涅槃門發知何處。滿笛聲中月色深。

會中祈禱

摩訶般若波羅密。字字放光盡大千。雨順風調春風暖。江湖龍象自安全。

開山錄開講

掘地求天好鈍痴。舌頭無骨至今疑。兒孫不免徧身汗。家醜猶揚鐵面皮。

峨山禪師言行錄 終

明治四拾年拾貳月廿五日印刷
明治四拾壹年壹月壹日發行

峨山禪師言行錄
定價金四拾錢

著者　日種讓山
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本石町三丁目拾七番地
發行者　清水幾之助　京都市上京區二條通河原町東入貳番戶
印刷者　青木弘　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目拾二番地

發賣所
東京市日本橋區本石町三丁目　寶文館
京都市上京區二條河原町　寶文館
大阪市東區備後町四丁目　寶文館
大阪市北區東梅田町　盛文館
京都市上京區二條河原町　芝金聲堂
神戸市元町五丁目　吉岡支店

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

不許複製

324
64

48

324
64

324
64

019386−000−4

324−64

峨山禅師言行録

日種 讓山／著

M41. 1

ABG−0086